
幻想郷フハフハン録

アイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想郷フハフハン録

【Nコード】

N4447Y

【作者名】

アイン

【あらすじ】

東方のフハフハンとした話を書きます。

すいかドロップ（前書き）

この作品は東方Projectの二次創作作品です。オリ主はいませんがオリキャラはちよくちよく出ます。世界観は一緒ですが、それぞれは短編で明確な主人公は存在しません。

すいかドロップ

萃めて萃めて萃めて 疎^{はな}す

青天の頃、淡い木漏れ日、絶好の散策日和。
そして二本角のかわいい私。

今日はどこに行こうか。

巫女は昨日おちよくった、白黒も右に同じ。
隙間の狸は胡散臭い、冥界は遠い。
総じて行く気が起きない。
ぶっちゃけてしまうならメンドクサイ。

このまま酒でもかっくらっているかと思っていたところで、
里の中で妙な物を見つけた。

その少女はそれを嬉しそうに片手で持ち、
太陽に掲げて反射を楽しんでいた。

ありゃ鉱石じゃないか。

地下でも見たことはあるがあんなに綺麗な形の物は初めて見た。
綺麗な楕円系の緑色の宝石、ああゆうのを玉というのだろう。
あれ一つ売るだけで一財産稼げるんじゃないだろうか。

何でそんなものをあんな年端もいらない少女が持っているのだろう。
家から持ち出してきたしまったのだろうか。

人間の女は光物が好きだというのがまさかあんな小さな少女の頃から
そうだとは・・・

私は目の前の少女の末恐ろしさに戦慄していた。

まあ自分ももし酒代に金かかるのならと考えると恐ろしくて堪らないのは置いておく。

少女は石に顔を近付けるとおもむろに――

「ちょおおおおおおおい!!!」

危なかった、体を実体に戻し鉱石を口に入れそうになる手を掴んで止めた。

少女にとっては突然私が現れたように見えただろう。
ビクッと体を震わせこっちを見ていた。

「お譲ちゃん、こんなもの食べちゃいけないよ」

手を離し、目尻に微かに滲んでいた少女の涙を拭う。

未だ何を言われているのか分かっていないのだろう、少女は首をかしげながら頭にいくつもの疑問符を浮かべていた。
私は嘆息しながらもう一度忠告することにした。

「お譲ちゃん、鉱石は食べ物じゃない」

依然黙ったままの少女、これは鉱石の説明からしなければいけないのか？

段々面倒くさくなって来た私に少女は口を開いた。

「これ、ド、ロップ」

あまり喋るのが得意ではないのだろう、結構人見知りする子どもだ

と見た。

そしてドロップ？ドロップとはなんぞや？
今までに聞いたことのない単語。

「ドロップ？」

思わず口にしてしまった私に、コクコクと頷くと少女はその石を私に差し出してきた。

思わず受け取ってしまう、手のひらに乗ったそれはキラキラと輝いていて――

「甘い？」

微かに甘い匂いが鼻をついた餡子や団子のような匂いではない。
もっと爽やかな・・・

「なんかメロンみたいな匂いだね？」

そう果物のような香りである。

少女はまた頷くとカラカラと金属のぶつかる音をさせながら小さな缶を取り出した。

その缶を見せてくる少女、なんか可愛い。

「メロ、ン、あじ。」

缶を受け取ると教えてくれた。

その缶には上に封がされていて、振るとカラカラと音がする。

「メロン味い？」

訝しみ缶を観察してみる。

”サ○マドロップス”その缶は大きな文字でそう書かれてあった。恐らくはこの商品の名前なのであろう。

よく見るとそこにメロンだのリンゴだのパイナップルだの書かれている。

外来の珍しいモノがこんなところでお目にかかれるとは。しかしなんだメロン味って。

これがメロンでないことは誰がどう見ても明らかである。ならば……

今度は私が首を傾げる番だった。

すると少女がそれを察したのか、缶を貸してという風に両手をこちらに差し出してきた
いちいち動作が可愛いなあ、こんちくせう。

「ああ、ごめんね、ほら返すよ。」

缶を渡すと私に見えるようにして缶の封を開ける。
中から手にあるのと同じような物をだした。
あれもドロップなのだろうか？

「パ、インあ、じ。」

そう私に言うとき少女はそれを口に入れた。
今度は制止する暇もなかった。
体に変化はなさそうである。
というか顔が緩んで嬉しそうである。

「お、いしい。」

みると口の中で転がしている様子
そりゃそうだ、あれを丸呑みしていたら喉が詰まって当たり前だもの
納得納得。

「私の勘違いだったみたいだね。」

いつまでも持っていては少女が食べられない。
この緑色も返そうとすると手で遮られた。

「たべて」

お前も食べてみるということらしい。

「いいのかい、お譲ちゃんのドロップが一個減っちゃうよ?」

コクリと頷く少女、思わずいいいいこしてしまいそうになる。
もう一度手の上にあるドロップを見る。

「じゃあ」

その瞬間私の脳裏にある思いが駆け抜けた。

相手から渡され相手は他のを食べて毒が入っていないことをみせる。

← 私にも食べてみろと言ってくる

← 何も考えず食べる私↑今ここ

なんか前にもあったなあこんなの・・・
前の時の事を踏襲してない辺り実に私達らしいと思う。

「お、うまい」

まあ心配するまでもないとは思っていたけど口の中にはきちんとメロン味が広がった。

私の感想に顔を綻ばせる少女。

少し体を弾ませながら機嫌良さそうに缶をカラカラ鳴らしている。

「ありがとう、お譲ちゃん。」

少女の頭をなでる。

「さ、やか」

地面に漢字を書いて自分を指さす。“彩香”
へえ、漢字を書けるのか
そういや半妖のが寺子屋を開いていたっけ、クソ真面目と聞いたから会ったことはあまりないけど・・・

「彩香か、私は伊吹萃香だ、伊吹萃香」

私も地面に字を書く。

多分・・・これであっていたと思う。

「一字お揃いだな。」

目線をあわせようとしなくともあっているのが悔しいやら悲しいや

ら。

「よし、彩香お礼をしよう。なんでもいいよ、いってみな。」

別に特に理由はない。

もらったものは返そうという話し。

こんな小さい子にとってこの缶の一粒一粒は私が勘違いしたように本当に鉱石の一粒一粒のようなものなのだろうから。これはほんのお礼。

「・・・なんでも、い、いの？」

おずおずと言ってくる

「ああ、鬼は嘘をつかない。」

「・・・お、に？」

そういえば、私が何者なのかを教えるのを忘れていたか。まあ、突然現れた時点でもともな奴とは思われていなかっただろう。

「そう、私は人を喰う恐い化物さ。」

試すように言う、何と返ってくるか興味はあった。

「すこ、し、こ、こわい。」

体を見ると少し震えている。

「いい娘だね、正直ものは好きさ。」

ならば、それを知った上で彼女は何を願うのだろう。
私に消えてくれと願うのだろうか。
それとも・・・

「ともだちになって」

そこだけは、その言葉だけは一切の澱みなく発せられた。

目の前の化物に友達になれと言ったのか？
恐いと言いながら、体を震わせながら。

「お譲ちゃん、私は鬼だ。人を攫うし、喰いもする。やろうと思えば人里だって襲える。あんたの小さな体なんか一握りで潰せる。そんな化物と、あんたは友達になろうってのかい？」

自分で口調が変わったことを自覚した。

素直にドロップが欲しいと言えばよかったのだ。

それなら私は喜んで萃めただろうに、変なことを言うから私のなにかに触れることになる。

鬼とは畏れられるものである。

私は鬼であることを誇りに思っている。

人が好きだった。

そんな私達を騙したのは誰だ？

他ならぬ人じゃないか、ならば・・・

「ともだちになって。」

・・・

「なんだって？」

「とも、だ、ちにな、りた、い。」

奇跡も此処で終了なのだろう、元の舌っ足らずに戻った。

まったく、大事な所を抜くなどというのだ、そこを伝えるべきではないのか。

なんか今まであった自分の中のかなにかが白けていくを感じる。

呆れて声もでねえ。

なんであったばかりの私にそんなことが言えるんだよ？

「わた、し、と、もだ、ち、いない、か、ら。」

ん？

「わ、たし、うま、くしゃ、べ、れない、から。」

ああ、そのせいで虐められたんだろうな、子どもはその辺敏感なものなあ。

「あんなに、しゃべっ、て、もらった、の、はじ、めてだ、から。」

途切れ途切れながらも喋る。

なんか、泣きそうになってないか？

「ともだちに、なって、くだ、さい。」

遂に決壊する涙腺。

あゝあ、泣いた泣いた、っていうか泣かせた泣かせた。
何をやっているんだ私は。

恩返ししようといったのは私なのに泣かせてからに、実にけしからん。

「あああ！泣くなお譲ちゃん。」

慌ててあやそうとする私。

人里の中なので誰が見てるか分かったもんじゃないのに・・・

考える。呆れながらも、恐怖を抑えて、私に立ち向かった少女を考える。

元来、鬼退治ってものは力比べに勝って成り立つもんだが、勇気を持ち己の力で認めさせる。

なんやかんや言ったがいいだろう、というか根本の自分が認めちゃってるし。

なにより、そうなりたいと思ってしまった私もいる。

化物を恐れるのは仕方ないが、少しづつ慣らしてやろう。

まあ、本当に危ないような所は避けるとして、勇儀なんぞはああみえて結構面倒見いいし、面白いことになりそうだ。

この小さな友達を連れて何処に行こうか。

まあ、何処でも行けるさ、時間はある。

いろいろな場所に行こう

いろいろな人と出会い、いろいろな事を学ぼう。
とても素敵な話をしよう。

とりあえず――

「こちらこそ、友達になってください。」

まずはその第一歩。

すいかドロップ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

感想、ご指摘ありましたら今後の肥やしにしますので、是非お願いいたします。

瀟洒ですが何か？（前書き）

今回は咲夜さんですが、そのまま紅魔館に移行したりはしません。

瀟洒ですが何か？

Time waits for none

「これはどういことですかお嬢様？」

ここは紅魔館

悪魔が棲む真っ紅な館

その応接間に私のご主人様がいる。

「待ちなさい咲夜、お願いだからそのナイフを降ろして、いや、マジでお願いします。」

もはや土下座しそうな勢いのお嬢様。

応接間は惨状となっている。

窓ガラスは砕け、テーブルは割れ、カップもほとんど割れている。

お嬢様、あの絵はフェル◯ールですよ？

私がどれだけ紅魔館の出費について頭を悩ませているか知ってもらいたい光景である。

「〜でね、それで霊夢が――」

ずっと説明を続けているお嬢様。

「そうですか、つまり悪いのはお嬢様なのですね？」

「咲夜！？人の話を聞いていたの！！？」

愕然とした顔で突っ込むお嬢様、正直お嬢様の弁解なんて一切耳に

入っていない私。

いっぺん死んだったらええねん、いや、死なないか。

「とにかく、足りなくなったものを発注してきますので外出しますよ？今日のティータイムはお預けです。」

「そんな!？」

「自業自得です、今日ぐらい我慢してください。」

「だから私じゃなくて霊夢が―」いってきますね。」

「・・・はい。」

渋々といった感じで席に座り直すお嬢様、だからいっぺん死んだったらええねん。

応接間を出て廊下を歩く。

何人かの妖精メイドと擦れ違いながら溜め息をついた。彼らに目配せしておくのを忘れない。

吐く息が白い。

外を見るときもうすっかり冬である。

はぁ、寒い寒い。

いつものメイド服にマフラーをまいて私は外に出た。

「およ？咲夜さん、今日もお出かけですか？」

我が家のポンコツ門番、紅美鈴、珍しく今日は起きている。

「そうよ、お嬢様が応接間の備品グシャグシャにしちゃったの、今からその補充に行ってくるわ。」

擦れ違うが目線を交わすことはない。

「そうですか、それは難儀な。」

アハハと笑う美鈴、暢気に門に体重を預けている。

「大丈夫だとは思うけど、留守は頼んだわよ？」

早く帰って来ないとまた紅白だの白黒だのがまた襲撃に来る可能性がある。

「はい、精一杯大地からエネルギーを吸収しておきます。」

こやつ寝る気満々じゃないか、ああもうどいつもこいつも・・・
私は買い物への道を急いだ。

「というわけで、ヘキスト製のティーセット二組をいただきたいのですが。」

「あいよ」

霧雨商店は、人里の中でも一番の規模を誇る商家である。

一番品揃えが良く、また、一番愛用しているため値段交渉もしやすい。

「それと、応接間に飾る絵画が欲しいのですが。」

「そうですね、絵画となると数が少ないですが、たしか――」

店主は顎に蓄えた髭をガシガシ掻くと奥に引っ込んでいった。

「○ヤガール、○ネ、ダ○、有名所はこの辺りでしょうな。」

そうやって並ぶ絵画、店主、重要文化財を何処から手に入れてきたのですか？

「分かりました、この際です。全て紅魔館まで運んでおいってください。」

屋敷に関することで一切手は抜きません、それは最低限必要な経費であり節約などの思考が介在する余地はありません。

「畏まりました、今後ともご贔屓ひこぎに。」

一度頭を下げまた引っ込んでいく店主。
これでとりあえずは終わり。

「お邪魔しました。」

誰も居なくなった店内に挨拶を済ませ、店を出た。

人里を歩く。

まあ、何を買うでもない。

ただでさえ経理が危ないのだ、気軽に何かを買うつもりはない。

ハア

それにしても寒い、天気はいいくせに太陽は少し暖かい位。
もう少し頑張れ太陽。

「泣くなお嬢ちゃん！」

何処からか声が聞こえた。

確か神社の宴会で騒いでいた鬼の声ではなかったか。

また、何か仕出かしたのか

巻き込まれたくない、その一心で私は声のする路地を一瞥するだけに留めた。

そこにいたのは小さい子供を泣かして焦っている鬼。特に問題はなさそうだが、何をやっているんだか。

再び大通りを歩くが、いくつかの店舗が目に入る。

甘味処、問屋、雑貨店――

・・・問屋

「あゝゝゝあ。」

どうしようか、半袖だったしなあ、まあそんなの全然気にしてなかったけどなあ。

大地からもエネルギーを吸収してるらしいし。

「すみません。」

そういいながらも、私の足は問屋に向いていた。

「いらつしやい。」

出てきたのは痩せぎすの男。

「捜して欲しい服があるのですが。」

帰り道。

寒い、さむい。

何かもっと手軽な移動手段がないものだろうか。

ハア

吐息で自分の手を暖める。

今度河童に作ってもらおうか。

なんせ盟友なのだし、なんか私の事をあまり人間として見ていないような気がするのは別として・・・

「真枇^{まび}!!!」

霧の湖に差し掛かった所で、何処からか悲鳴が聞こえた。
見ると百足のような妖怪に襲われる二人。

一人は氷精、もう一人は人間の少年。

ハア、面倒くさい、巫女はどうしたのだ、巫女は。

あの出涸らしばかり飲む貧乏紅白め。

氷精だけなら助けはしないのだが、また要らぬ出費だ。

私はナイフを一本だけ投擲した。

ナイフは百足の体に刺さり、苦しそうに身をくねらせていた。
二人の逃げ出す時間は作れただろう。

無理だとしても致命傷だ、追うことはできない。」

私は目を離し、紅魔館への道のりを進んだ。
霧の湖を抜けて紅魔館へと至る。

「やあ、咲夜さん、お帰りなさい。お望みのお買い物はできましたか？」

「・・・一つできなかったわね。」

「そうですか、紙袋を持っている所を見ると、私的な買い物で？」
「・・・そうね。」

美鈴を見る。

別に寒そうにはしていない。

体を包むは一張羅のチャイナ服。

刻まれたスリットは、健康的な脚をこれでもかと見せつけるくらいに深い。

足は靴のみを履き、頭部にあるのは“龍”の字のついた帽子だけ。

見ていて寒い。

「最近、寒くなって来たわね。」

「そうですね。」

他人事のように言うこの女。

「あなた、服はどうしたの？」

「里の子にあげちゃいまして・・・」

アハハと笑う、それで自分の服がなくなってどうするんだ。
こんなに寒いのにぼろぼろの服で遊んでいるんですだと？

今はお前が半袖で立っているじゃないか。
やっぱり、寒かったんじゃないか。

馬鹿じゃなからうか。

「今度から、もしそういう子を見つけたら私に相談しなさい。」

ガサゴソと紙袋を漁る。

「ほら、これでも着けてなさい。」

渡したのは甲の部分に星のついた手袋と半纏。

「おお、いいんですか!？」

「見てるこっちが寒いだけよ。」

目を輝かせている。

「後でまた、薬湯でも持ってくるわ。」

門を通り過ぎ玄関に向かう。

「ありがとうございます。」

「気にしないでいいわ。」

後ろから聞こえてくる声に答える。

紙袋にはまだ荷物が入っている。

それを置いて向かわなくては。

季節が間に合うだろうか、いや、間に合わせてみせる。

問屋に探していた服はなかったけど。

なければ作ればいい。

今度は子供にあげてしまわないように釘を差さなくては。

私に対処すればいいのだ、うまくいったら紅魔館も働手が増えるかもしれない。

袋の中の毛玉だろうが、布だろうが、私の手にかかれば冬服になるのだ。

なにせ私は瀟洒なメイド。

だから当然

「お嬢様、ティータイムの時間ですよ」

こちらの準備も完璧である。

瀟洒ですが何か？（後書き）

読了ありがとうございました。

虎鵜

種は蒔いた、それを肥え太らせるのはあなた達だ。

今回のこの出来事は私にとって不愉快極まりない。

私にとっては正にアイデンティティであつたし、らしくないと自分でも自覚している。

正体不明の私が自分自身を否定する羽目になるとは。

夜が来る、今日も永い夜が来る。

木っ葉はざわめき、鳥は啼き、丸い月が出張ってくれば、外はもう夜である。

影は伸び、人は暗闇の中で、心細い灯りを燈す^{とも}。

脚色を架けよう、一つの物を複数に、そこに恐怖が産まれる。何も危険がないモノを人は恐怖で避ける。

闇夜は修羅の巷

薄暮の彼方に至るまで、そのお時間は私達のものである。

それでだ、如何にも私の体は、人に言わせるのなら不定形であるらしい。

時には虎に見え、その癖、鵜^{つぐみ}の様に啼くという。

誰が付けたのかは知らないが、正鵠を射てはいまい。

なにせこの体は悲しい程にその証言と違っている。

そんなだから、いつしか正体不明と言われ人々に恐れられた。

知られないことが少なからず私のアイデンティティだった。

なんせ知らないものを人は恐がるから、その本質を見極めようとし
ないで、あなた達が逃げて行くから驚かすんじゃないか。

場面なんて何も変わらない一つの森の夜の話。

女は森を駆けていた、何がしたいかは分からないが、夜露で湿った
土の上を必死に腕を振るって駆けていく。

私の出番じゃないだろうか、妙な確信がある。

少女は怯えている、それが垂れ下がる木の枝にか、長く伸びた自分
の影にかは別として、何かに酷く怯えていた。

最近私を嗅ぎ回る女がいて、煩わしいっらない。

おまけにそいつは啼き声を恐れない、小さな子供だけ連れて危険渦
巻く夜の世界に足を踏み出すのである。

危なっかしい事この上ないその様は、私でさえ一時頭を抱えたくら
いだ。

今はそんなことを考える時ではない。

既に種は蒔かれているが、偶には私が肥えさせるのも吝やたらかでない。
ただ啼く、それだけでいいのだ。

○○○○○○○○。。。。！！！！

それは足を止め、真っ青な顔で辺りを見渡した。

何と聞こえているかは分からない。

しかし、私の鳴き声は確実に彼女を恐怖に陥れていた。

○○○○○○○○○○。。。。！！！！

小刻みに震えている女。

夜が怖いことは分かっていたはずなのに。

何で夜外にでた？

悲しいかなこの世界は無力な人に優しくないぞ。

最近夜に出歩く人間も減ったというのに。

まあ、私のせいでもあるのだが・・・

さっさと逃げ出せ、私の声に恐れを成して。

里人は家へお帰り。

腰が砕けたのか、すぐにはそこから動くことができない様子。

まあ、精々恐がらせておく、それで二度と来ることはないだろう。
さあ恐れろ。

私は彼女の前に姿を見せた。

「・・・お父さん。」

.....

今、何と言った？

女に近付く、不様にも少しずつ後ろに下がる。

○○○○○○。。。。！！！！

「やめてえ、お願い、許して、もう、やだあ。」

絞り出すようなその声

私はその者の一番恐いモノに見える様である。
ならば、この女が一番恐いモノは・・・

「自分の父、だと？」

私は女の耳に入らないように呟く。

私を父と見た女は頭を抱え丸まっていた。
まるで何かから身を守るように。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい——」

何度も小声で謝る、何だ、この女はそんなに悪い事でもしたのか。
こんなことは初めてだ。

苛立つ。

私が求めていた恐怖はそれじゃない。

もっと未知のモノだ、私は正体不明なのだ。

もっと訳が分からないもので、何が恐いのか明確であってはならない。

「やめた。」

私は能力を解いた。

こんなのは違う、不愉快だ。

人は見知らぬモノを恐がればいいのであって、何か分かるものを最も恐いモノにすべきではない。

在り方が間違っている。
私が揺さぶられている。

女は突然姿を消した父親と、突然姿を現した私に驚いていることだろう。

喜べ、私の姿を本当の姿をちゃんと見たのはお前が初めてだよ。
そんなことはどうでもいい。

「不愉快だ、女、それは不粹すぎる。」
「へっ？」

昏い闇の中、月明かりだけを頼りにして女を見る。
何だ？

顔には痣ができ、腕も擦り傷だらけじゃないか。
見えている部分だけでそうなのだから、見えない所はもっとあるの
だろう。

「私は正体不明なんだ、決してお前の親父殿ではない。」

それだけで力が抜ける少女。

何だ、人型だからと私を侮ったのか？

父は私より恐かったか？

私は目に見えて父より怖いぞ、なんせ人を喰うからな。
だから、攻め手を変える。

「親父殿は手を挙げるのか？」

「・・・はい。」

「恐いのか？」

「・・・はい。」

それだけ聞ければ十分

「さっさと里に帰れ。」

私は背を向ける

「そんなっ!!」

「父が殴るよりもこの森は怖い、どれだけ苦しかろうと、人ならば生きていけ。」

短い人生だからこそ、安易に死を選ばない。

里の人間からはそんな印象を受けた。

愚直で真っ直ぐでつまらない。

そんな印象を人から受けた。

「すいません・・・」

後ろから申し訳なさそうな声が掛けられる。

本当にいい度胸だ。

「なんだ？」

これを最後にしよう、そう考えて私は背中越しに声をかけた。

「里って・・・どこら辺ですかね？」

・・・フム、嘘ではなさそうである。

「外人か、お前は。」

どうも外の人間であるらしい。
そう考えるなら、確かに納得する。
不思議な格好は外の格好だったのか。

「ハア、里からしたら確かに私は外の者ですね。」

段々慣れてきたのか口調が変わる。
というか本来がこれなんだろう。

「なら、家に帰るのは諦めろ。」

「本当ですか!？」

途端に明るくなる女、ここは絶望する所だ。

「それは願ったり叶ったりといえますか。」

溜め息をつく。

「もういい、里はあっちだ。」

指差した先に、人里がある。

もうじき夜が明ける、今ならば、取って喰われることもなかろう。

「ありがとうございました。」

体を起こして、指差した先を見る。

「真っ直ぐ、歩いて行け。」

お礼などいらない、さっさと消えろ。

背を向けていると歩き出す音がする。
少しづつ足音が遠くなる。

「ああ、そうだ。」

いい事を思いついた。

いつも私がメンドクさいと頭を悩ませているのだ。

これはチャンスじゃないか。

精々困らせてやる。

そんで困って、また私を困らせに来い。

「人里に降りたら稗田という家を訪ねろ、ヌエ様からの紹介だ。」

これは私からの挑戦状だ。

東方忘却録（前書き）

これだけ毛色が違いますが、最後にはフハフハンとしますので。
一応、これは続編という形になります。

東方忘却録

捻じれに捻れた捻じれを ほど 綻く

満月は程遠く、月の頃は皿ではない。

「雨か・・・」

呟く声のよりもっと前から雨は降っていた。
その呟きを掻き消すように五月蠅い音で。

滝のような雨だ、最近の言葉で言うならバケツを引っ繰り返したような雨である。

蠟燭一本で照らす私の部屋は何やらおどろおどろしい。
書物にあたって文献を調べる。

今日は雨が酷くなりそうだったので、早めに子供達を帰して置いたのだが、正解だったようである。

明日は算術をする予定なのだが、この雨では明日出来るか如何か。
おそらくはできないだろう。

それでも、準備をしない訳にはいかない。

これだけ雨が降ってしまうと里の人は大丈夫だろうか、畑などは大変かもしれない。

これほどの量の水では逆に土から栄養が逃げ出してしまうだろう。

満月の仕事を終えた私としては今はあまり気がかりもないのだが、

心配ではある。

私はポケットから今日生徒からもらったものを取り出した。自前の包み紙に包んで保存してあるそれは、ドロップというらしい。砂糖を固めたもので、それを舌で転がして楽しむのだそうだ。

人見知りの強い子だったが、最近友達が出来たと嬉しそうにしている。

それについては少し安心したのだが、その相手が、のんべえの鬼、あの伊吹萃香と聞いて少し気が遠くなった。

頼むから授業中に酒を飲みだしてくれるなよ。

鬼とは少し会話の席を設けなければいけないのかもしれない。

他にも生徒の男児が百足の妖怪に襲われたらしいし（まあ信じられない話だが、氷精が助けたらしい。）、何だかんだと問題が多い。そうだ、授業と言ったら、最近、稗田家に新しい女中が入ったようだ。

挨拶がてらに、稗田家の主人と一緒に顔を見せに来た時に話を聞いてみたら、外の人間の様で、ダイガクセイだと話していた。

私の参考書を見て懐かしいと呟いていた。

それは里の成人した一般男性にも教えていない（というか必要ない）ものだった為これは驚いた。

一度特別講師として招いてみるのもいいかもしれない。

なにせ、私の授業はつまらないしな・・・

そこらへんは私も勉強させてもらえるかもしれん。

理解はしているが何分性分なのだ、遊びを入れられない自分が偶に煩わしくなるが、そこはどうしようもない、三つ子の魂百までというが私はもっと長い事になる。

・・・普段子供に囲まれているからだろうか
夜なんかは人が恋しくなる時もある。

どうしようか、もう授業の準備は終わった。

夜が来る、長い夜が。

今日は誰もいないのである。

話し相手が欲しくもあるが、いないのならば仕方ない。

願わくば何もありませんように。

少し早いが私は床についた。

外は雨が降っている、全てを拒むような爆弾のような雨。

サイキョーのあたい(前書き)

自分の戦闘描写の下手さに脱帽、チルノちゃんは書くの難しかったです(汗)

サイキョーのあたい

「やめようよ、山にはこわいのがでるんだって」

「こわいのってなにさ」

「たしか、ぬー」「おーい、お前ら授業中に何しゃべってるんだー!!」
」

妖精が惑うのは誰の仕業？

「・・・ル・・・ん・・・!!」

私を呼ぶ声がある。

大きく響いたその声は他の何かの耳にも入っているかもしれない。

急がなくては、余計なものがきてしまうかもしれない。

大体、毎回毎回大声で呼ぶなど言っているのに・・・

「・ルノ・・・ちゃ・・・!!」

まったく、おちおち、ガマとにらめっこもしてられない。

まあ私が負けるわけないけどね。

「チルノちゃん!!!!」

分かってるって、もう、真柢^{まび}は本当に話を聞かない。

もう目と鼻の先だ。

何もなさそうなのでよかった。

「もう、マビ、うるさいわー」「チルノちゃん」
「わかってるわよ!!」

目の前にいるっての。

私の姿を見た時から満面の笑顔になる真柢。

「あそぼ!!」

「わかったわよ。」

どうせ何をしようなんてないのだ。

「今日はなにすんのさ？」

「・・・わかんない。」

だろうさ。

どうすんのさ、私知らないよ。

「大体、朱莉とかはどうしたのさ。」

真柢が仲のいい連中を連れていない、どうしたんだろうか。

「うん、今日はあいつら連れてきちゃ駄目なんだって」

でた、真柢はそういう所がある。

それが何かは知らないが、こいつがこんな事を言い出した時は奇妙なほどにあたる。

「ふうん、マビがそういうんならそうなんだろうね。」

それにしても、そんな状況でここに来ていいんだろうか。
というか、元々、用がある時じゃないとここには来んってのに。

「じゃあ何処に行くのさ？」

「うーん、じゃあもうなんてどう？」

指差したのは妖怪の森。

「なんでさ？」

「なんとなく。」

親にもきつく言われているはずである。
山には入るなど、妖怪の山は恐いのだ。
それでも行くと言っているのだろうか。

「あそこは危ないわよ。」

「チルノちゃんがいるから大丈夫でしょ？」

うわ、そんなキラキラした目で顔であたいを見るな。
・・・まあ山も下の方なら大丈夫だろう。

「わかったわよ、なんせあたいてばサイキョーなんだから。」

言わなきゃよかったあんなこと・・・

妖怪の山に入ったのはいいものの特にすることもないのか適当に散策
していた。

「森に来てなにをするつもりだったのさ」

「ちょっと天狗にあいたかったの」

「帰るわよ!」

バカ野郎、この野郎、天狗は山の頂上に居座る連中じゃないか。

あんな、他の奴らと関わりを持たないような奴ら相手に出来る訳がない。

一羽と戦おうとすると天狗全体で襲いかかってくるような奴らだ。

無理だ、私ならまだしも真枇は人間である。

死んだら取り返しがつかない。

「大丈夫だって」

何が大丈夫かわからない、ただでさえいまは最近気性の荒い妖怪がいるらしいのだ。

誰かに目をつけられる前に帰っておこう。

「話は聞きました、それで？」

一陣の風が吹いた後、振り返ると鴉がいた。

あいつ幻想郷最速とか言ってる奴だ。

おそらく逃げられない、本当に来るんじゃないかった。

「答えなさい。」

「別に、ただ見たかったただだよ。」

こいつ、本当に喧嘩売ってんじゃないだろうか。

笑顔で何言ってるんだよ。

「マビ、黙りなさい!!」

殺されちゃったらどうすんのさ。

とりあえずいつ何があってもいいように戦闘態勢をとる。

まあ何をしようと逃げられない事はわかってるんだけど・・・

「その理由を聞きたかったんだけど？」

まだ話してくれる様である。

ひとまず安心。

「本当に天狗に会いたかったんだ。文々丸新聞いつも読ませてもらってます。」

「あやや、購読者の方でしたか。」

急に態度が変わったなこいつ。

「文々丸なんちゃらってなにさ？」

「私が発行している新聞です。」

ニコニコ笑っているようには見えるが目が笑っていない。
あたいに難しいことがわかるかっての。

「それならなおさらですね、人里に帰ってください。いまこの山は人が入っている場所ではありません。」

「なんで？」

「あなたに教える必要はありません。」

そりゃそうだ、まず話しがこんなに成り立っている時点でおかしい。
相手はこの山の頂点の一羽、どこまでも高圧的な天狗なのである。

話は終わった。

「マビ、行くよ。」

とりあえず引き下がらねば、もうタイムアウトである。

「折角のお客様をお送りしたい所なのですが、私にも用事があります。」

少しシュンとしたようではあるがどうせ演技なのだろう。

「妖精なんかに任せるのは気が進まないですけど、頼みましたよ？」

だから目が笑ってないって、ニツコリ笑ってはいるんだけどなあ。

「まかせなさい、なんたってあたいはサイキョーなんだから!!」

見下してくるのは気に食わないけど、戦って勝てる訳もない。
私に出来るのは精々強がっておく事だけ。

「なにが最強なんだか……。」

天狗は何か呟いて消えた。

飛んでいく姿すら、私には見えなかった。

「さつさと山を降りるわよ、マビ」

「うん」

さつきが嘘だったかのように素直についてくる。

なにがしたかったのか本当に分からない。
とりあえず急ごう、日はまだ高いけど、天狗が降りろと言ったのだ、
急ぐに越したことはない。

「■■■■■■■■■■!!!!!!」

すぐ近くで、重い体を引きずるような音が聞こえた。
何なんだ、天狗がいなくなった途端に来るなんて。
おそらく、いなくなるのをまっていたのだろう、枯れ葉も目立つ木
々の中、赤い慟猛な目がこっちを見ていた。

「・・・逃げるわよ、マビ。」
「うん!!」

ダッシュでそこから逃げ出すあたい達、
空に逃げる事が出来ないのが悔やまれる。
飛べない真枇を抱えた私ではすぐに撃ち落とされてしまう。
救いなのは相手の移動速度がそこまで速くない事だが、その差は少
しづつではあるが詰まってきている。

そこまで登ってもいなかったから森を抜けるのは不可能じゃない、
でもその先がない。
おそらくこの差は森を出る頃にはなくなるだろう。

覚悟を決めなければならない。
気付けば。
もう出口は目と鼻の先である。

「マビ、あんたまだ走れる？」

「う、うん大丈夫。」

限界だ、虚勢を張っているが息も絶え絶え、足取りも重い。

無理もない、この寒い中、荒れた道なき道を全力で降ってきたのだ、五歳のこどもの限界だろう。

「もう少しがんばりな、出口はすぐそこだから、真っ直ぐ走るんだよ!!!」

私は走るのを止めて怪物を見据える。

「チルノちゃん!!!」

真柢は殺させない、あたいは死んだって替えが利くけど、真柢の体は一つしかない。

なら、玉砕覚悟で私が――

「いいから、行きな!!!」

「やだ!!!」

真柢は離れなかった。

くそ、いいから行けよ、あたいじゃあ、あんなの倒せないよ。

真柢が死んじゃうよ。

「お願いだから行って!!!!」

「やだ!!!!」

怪物はもうすぐそこである。

もう視界には霧の湖も見えている。

自分の憩いの場所は目の前にある。

それでも、腹を括った。

「真枇、後ろの木にでも隠れてな。」

「でも・・・」

「いいから。」

促すと、少し離れた所に立ってこちらを見る真枇。

ホントは遠くに逃げて欲しかったけどまあ仕方がない。

「守るって、言ったもんね。」

あいつを、ここで殺す。

方法はそれしかない、力もない、頭もない、勝てる要素なんて一つもない、それでも、勝たなくちゃいけない。

「大丈夫よ真枇。」

不安そうにしている真枇に声をかける。

「なんたってあたいは、最強なんだから。」

考えてもみなかった、私が本気で自分の事を最強と呼ぶなんて。そんな実力もないのに、誰も認めてくれたことはないのに、それでも私は最強だと言った。

そんなの違うって分かってたけど、それでも言い続けた。

なら貫こうじゃないか。

手の平に冷氣を集める、季節や気候的にはまだ能力に向いていた事は幸いだった。

牽制がてらに氷の弾丸を放つが固い外殻に阻まれ弾かれる。

「■■■■■■■■■■!!!!!!」

歯向かったことへの怒りなのか、怒りの咆哮を挙げながら襲いかかってくる。

私は飛びあがってその攻撃をかわした、木々が生え並ぶ森の中、大きい向こうより小さい私の方が小回りが利く分動きは速い。

向かってくる化物をいなしながら弾幕をお見舞いするけれど、全て固い外殻に防がれる。

なら

「氷符「アイシクルフォール!!」」

スペルカードを使う。

私のスペルカードの中で一番貫通力のあるスペル。

「■■■■■■■■■■!!!!!!」

しかしその弾丸は外殻を少し傷つけるだけで終わった。
ダメージを受け怒り狂った化物はさらに暴れまわり始めた

「くそ!!」

思わず悪態が出る、既にもう、結果は出たと言っても過言ではない
だろう。

それが私達に不利なものであるというのはとても不本意だけど。

避ける、避ける、少しづつ避けるのが難しくなっていく。

「グッ!?!」

肩に掠った、少しづつ傷が増えていく。

暴れる化物は見境なく攻撃を始め――

「マビ!!!!!!」

化物の攻撃は私の後ろにいる真柢にも伸びてしまった。

私は真柢を逃がすために飛び出し、真柢を突き飛ばした体で化物の
重い一撃を受けることになった。

ドンッ!!

吹き飛ばされた私は太い木の幹にぶつかって止まる。

「カハッ・・・」

肺の中に溜まっていた空気は全て出て行く、今のは致命傷だ、まともな声が出せない。

呼吸もまともに出来ない。

化物へと視線を向けるとターゲットを真柢に絞ったようである。

私はもう戦えないと判断したのだろう。

実際その通りである。

体は傷だらけ、呼吸もまともにできない、意識を保っていた自分を褒めてやりたいくらいだ。

でも、だからといって私が真柢の前に立たない理由にはならない。

どこかで甘えがあったんだろう。

自分は死んでもいい、真柢が無事ならそれでいい。

なんせ私は妖精、何度でも生き返ることができるのだから。

でも真柢はここにいる、私が死ねば真柢も死ぬ。

死ねわけにはいかなかった。

「あん・・・た・・・の、あい・・・ては、あたい・・・でしょうが！！」

精一杯大声を張り上げた。

化物はこちらに視線を向ける。

目が合った途端、照準は再びこちらに向いた。

「■■■■■■■■■■!!!!」

再び向かってくる化物。

どうしよう、なんの当てもない。

意地もまあここまでだ、次の瞬間にはまた私の体は吹き飛んでいることだろう。

最後の足掻きだ、目を逸らさない、相手の動きに集中し、手に冷気を集める。

強い攻撃じゃなくていい、最も効率的で、最も早く、最も効果のあるものを選ぶ。

視線の先にあるのはさっきのスペルで傷つけた部分の外殻。冷気は固めずそこに置く。明確な形にはせずに極寒を目指す。

イメージ通りの想像、こんな緊急時じゃないのなら自分を褒めてやりたいのだが、残念ながらそんな時間はないようである。

私も前傾姿勢となって化物へ駆けだした。

勝負は一回限り、それ以降はもう体が動かない。

これに失敗すれば、真柢と私は仲良く死ぬのである。

そして私だけが生き返るのである。

まあ、失敗なんてしないけど。

避けることを考えるのを止めた。

接敵の瞬間、私は傷ついた外殻に向かって飛び込んだ。

これがラストスペル

「凍符「マイナスK」!!」

後の事なんて考えていなかった。

手に凝縮し、コンパクトにした冷気を外殻についた傷を通して体の中に打ち込んだ。

瞬間、再び恐ろしい衝撃が私を襲った。

体格が異次元程違うのだ、それは仕方のないことだと分かっているが、それでも次に来る衝撃は受け入れがたいものだ。
というか最早とばされているいま既に意識が飛びそうである。

「おめでとう、あなたの勝ちです。」

薄れゆく意識の中その声を聞いた。

「良い新聞の記事が出来ました。」

そういったのはホクホク顔の天狗。

「みていたんだったら助けたっていいじゃないのさ！」

もはや天狗だからとかしらない。

目を覚ましたのは妖怪の森、場所は変わっていないが、気付いた時には全てが終わっていた。

最初死んでいる百足を見て絶句した。

百足の後ろにはナイフが深々と刺さっており、これが致命傷だったと考えられる。

それ以外殆ど傷がない辺り私の攻撃はやはり無意味だったようだ。

私の考えでは、用事なんて嘘だったんだろう、天狗はずっと後ろについて私達のことを観察していたんじゃないだろうか。

「だって最強な妖精がいましたから。」

今度はニヤニヤと笑う、つくづく嫌な性格していると思う。

「ついでに言わせてもらおうなら、あの妖怪相手にはスペルカードを叫ぶ必要ありませんでしたけどね。」

「どういうことよ？」

なんか、会話が成立していなかったあの、相手がスペルカードを使っていなかったあの、そもそも弾幕を張っていなかったあの、いろいろと理由は話していたが、結局よく分からなかった。

なんせ私はバカだから。

自分で言うのはいいのに他人に言われたらカチンと来るこの矛盾はなんなんだろう。

別に弾幕ルールで戦わなくてよかったなんてどうゆうことさ？

まあ、そんなこともすぐに忘れてしまっただろうけど・・・

それよりも、とりあえず言っておくべきことがある。

「助けてくれてありがとう。」

真柢によると吹き飛ばされた私を受け止め助けてくれたらしい。

真柢は言わなかったけど多分化物を倒したのもこいつなんだろう。

「あやや、お礼を言われるとは思ってませんでした。」

意外そうな顔の天狗。

「あたいを助けてくれて、あの化物も倒してくれたんだろう？」

その言葉を聞いて苦笑する天狗。

「あなたを助けはしましたが、助けた時言ったでしょう、聞いていませんでしたか？」

「なにをさ？」

少し呆れたように吐息をはいて、その後もう一度私に向き直った。

「あの百足を倒したのはあなたです。」

「・・・嘘だ。」

「嘘だったら、あの時私は助けていません。」

・・・本当に私が倒したのだろうか。
そんな訳ない、なんせ致命傷は――

「あたいはナイフなんか持ってないよ。」

致命傷はあのナイフであつたはずである。

「ま、信じるか信じないかはあなたしだいですよ。」

そう言って目を持っていた本に落とした。

筆を走らせているので何かかいているのだろう。

「時期に日も暮れます、もう帰りなさい、恐い妖怪が出てきますよ。」

それだけ告げて化物の死体の方に向かって行った。

「言われなくても」

私はその背中を見送った後、私を心配そうに見つめていた真柢に目を向ける。

「帰りましょう。」

「うん」

体が痛むが意識を失っている間にも少しは回復していたのだろう、動けない程ではない。

こういう所は妖精万歳。

「チルノちゃん・・・」

「なにさ」

なにか気まずい沈黙。

森の出口を抜け霧の湖に辿り着いた。

人里まで送らなければいけないのでここは素通り。

「ごめんね。」

「いいよ。」

許す許す、今回は自業自得な面も多かったし。

少し赤みがかかってきた空の下、二人で歩いて行く。

「チルノちゃん。」

「なにさ？」

まだなにかあるのか、申し訳なさそうに声は続く。

「かっこよかったよ。」

「・・・なにいつてんのさ。」

少し返答が遅れたのは困ったからじゃない、嬉しかったからだ、本当の意味でその言葉を言われたことがなかったから。

「そんなの当たり前じゃない。」

でも、返す言葉は最初から決まっているのである。

「なんたってあたいは最強なんだから。」

カッコつけてみたくなる時もあるのだ。

サイキョーのあたり（後書き）

感想、ご指摘等いただけたら作者が泣いて喜びます。

冬にはやっぱり・・・

奇跡の価値に貴賤なし

サツサツサツ

紅葉も少なからず散った。

季節の変わり目というのは何とも不思議な物である。

憂鬱というか何と言うか、まあ、季節の変わり目より私が憂鬱なのは

「いくら掃いてもなくならない・・・」

むかつく、チョウむかつく。

参道を落ち葉で埋もれさせる訳にはいかない。

今はあちらこちらに見える程度だが、放っておくと絨毯のように降り積もるのだ。

それも風情に見えなくもないが参拝の方が困ってしまう。

それ即ち客が減る。

つまりはお金がエフンエフン。

まあ、醜いかもしれないが、仕方ない、毎日3人分の食費がかかるのだ。

単純に博霊神社の3倍かかっている、わりと切実な問題である。

こちらら趣味で掃除やってるような巫女とは違うのである。

一人だったら適当にできるのになあ、元は女子高生である。コンビニだってあったし、親もいた。

まあ、メンドくさかったら1日くらいお風呂に入らない日もあった。けど今はそうはいかない。家族がいるのである。

いや、前もいたけど、立場がちがうというか・・・

「早苗、これつかまえた!!」

後ろから声がかかる、この神社におわします2柱の1柱守矢諏訪子様

「どうしたんですか―」

!?

振り返った瞬間、私の目に飛び込んできたのは大きな瓶の中に封じ込められた氷精。

やべえ、動いてないよ。

何をされたのか知らないが瓶の中で身動きもしない。

や、殺っちまったのか?

「何やってんですか!?!」

「こいつ、私の友達のガマイじめたんだ、だからお仕置き!!」

なんてこった!?!

いやいや諏訪子様?

確かにあんたガマだよ、偉いよ?

超偉い、だって神様だもん。

でもね、あんた、それを友達のガマイじめられたくらいで使っちゃ駄目でしょうが。

あんた崇り神なんですよ?

「ハア」

思わず溜め息がでる。

もういい、とりあえず瓶詰め少女をなんとかしなければ。

「すぐ元の場所に返して来てください。」

「え〜。」

渋る神様、パツと見駄々っ子にしか見えない。

ここで私は必殺のカードを切ることにした。

「ご飯抜きますよ。」

「わかったよ〜。」

ブスツとしているが諏訪子様がやっても恐くはない。

大きな瓶を抱えて神社から出て行く諏訪子様、さすが、あんなでっかいフラフラップ廻すだけあって足腰がしっかりしている。

サツサツサツ

また元の掃除に戻った。

いつの間にやらまた落ち葉が増えている。

えいくそ、これを掃き終わったらお守りを作らなければ。

「早苗さん、こんにちは。」

「ハイ、こんにちは」

通り過ぎて行く参拝者の方に挨拶。

諏訪子様がいる時に来なくて本当によかった。

いや、お互いに、ね？

「早苗え」

今度はなんだ？

振り返ると、そこには神社に祭られているもう1柱、八坂神奈子様がいた。

「一杯付き合ってよ。」

そう言って杯を突き出してくる神様。

あんたは真っ昼間から酒かよ！！

両柱ともにもっととしっかりしてほしい。

まあ、神様としての自覚はあるから文句は言わないけど。

「無理です。」

「え」

反応が諏訪子様と同じである。

「私にも仕事があります。」

「護符はもうつくっておいたよ」

・・・マジで？

そんなことをしてくれるとは、なんとも気が利いている。

「なにか」「何も企んでないよ。」

ピシヤリと言われてしまった。

「暇だったからさ。」

カラカラと笑う神様。

それならまあ仕事もなくなった訳だけど・・・

「でもやっぱり止めときます。」

「なんでさ？」

「真っ昼間だからです。」

「じゃあ夜にしようか？」

「軽々しく力を使わないでください。」

「むう。」

こちらも拗ねてしまったような神奈子様。

容姿なんかも全て違うのに、何でこんなにとるそぶりが似ているんだろう。

「拗ねても駄目ですよ？」

「拗ねてなんかいない。」

それを拗ねているということです。

私は苦笑を洩らす。

「今は無理です。」

「なんでさ？」

また同じ問答か。

「参拝の方が来られますから。」

人が祈るその場所に巫女がいないのは職務怠慢でしょう？

「気にしなくてもいいのに。」

心にもそんなこと思っていないでしょう？

私はこの神様が人を愛している事を知っている。

もちろん、もう一人の小さな神様も。

「一応、この神社の巫女です。」

その気持ちを知ってるから、私も巫女として頑張れる。

「・・・分かったよ。」

神奈子様はクシャツと笑うと背中を向け立ち去って行った。

「一応、じゃないよ。」

振り返って一度だけ呟いたその声は私には聞こえなかったけど、心なしかその足取りは嬉しそうだった。

サツサツサツ

振り返るとまた少しだけ増えている落ち葉。

「こんにちは、早苗さん。」

「はい、こんにちは。」

参拝に来られた方に挨拶を交わす。

おそらくだがあの2柱は人がいない時を選んで声をかけてきている。

いつの間にか真上だった太陽が傾き気が付いたら夕暮れになっていた。

まだ少し残っている紅葉と夕焼けが重なってとても美しい。

「それで、あなたは？」

私は近くの太い木の枝の上に腰掛けている少女に目を向けた。

何かその木だけ、他の木よりも妙に紅葉が多かったから気にはなっていた。

「あ、あたしに言ってるの？」

急に矛先を向けられたからか、慌てている少女。

「ここには他に誰もいませんよ。」

きよろきよろと周りを見渡し確認する少女。

「直に陽もくれますが？」

「いいのよ、私別に何処に住んでるとかないから。」

少し寂しそうな目をする少女。

まあ、人間じゃないことは分かっていました。

「そうですか、ではこの紅葉もあなたが？」

「そうよ、私の名前は秋静葉、能力は「紅葉を司る程度の能力」。」

それはなんとも風情がある。

しかし枯れない花はないのだ、青々しかった緑は紅に変わり、最終的に朽ちる。

「もしかして、迷惑だった？」

状況を察したのか少し申し訳なさそうにする少女。

「いえいえ、そんなことはありません。」

メンドくさかったけど、いつもメンドくさがりながら掃除を行っているけど

「嘘をつかないで、だってあなたずっと掃除していたじゃない。」

「嘘なんかついていませんよ。」

そう、嘘じゃない、メンドくさい気持ちもホント、でも、止めたい
と思ったことはない。

「おかげで参拝の方と挨拶ができました。」

「・・・貴方の手、豆だらけじゃない。」

「そりゃ人の子ですもの。」

元々竹箒なんて持ったこともない、それが1日何時間も掃いている
のだ、豆もできるさ。

「慣れてないのか知らないけど、鼻緒が食い込んで血がでてるよ。」

「そうなんですよ、痛くて痛くて。」

永遠亭のお薬には大変お世話になっております。
確かにメンドくさいが・・・

「でもやっぱりメイワクではないのですよ。」

「なんでよ!!」

目に涙を溜めている。

私はこの人の何かに触れてしまったらしい。

「そんなの愚問ですよ。」

落ちていた一葉を拾い上げる。

真っ紅な一葉。

「こんなに綺麗なんですもの。」

参道の真っ紅な絨毯を一番見てみたいと思ったのは他ならぬ私であるという自負がある。

「季節に腹をたててどうしますか。」

春には桜が参道を飾り

夏には蝉時雨を聞いて

秋には紅葉を楽しみ

冬には雪を掻き分けるのである。

季節は流れいくもので、私たちはそれに身を任せるのである。

「この手間は当然のものなのです、春には桜を、秋には紅葉を、私の手は掃くのです。」

変わり行く景色を待ち受けるために、過去の季節にサヨナラを告げて、新しい季節を迎えるために。

だから季節の変わり目は憂鬱なのだ、別れを告げる季節が愛おしい

がゆえに、新しい季節への微かな不安をのせて。

「その別れを告げたはずの季節に貴方は会わせてくれた。」

だから

「その奇跡に感謝しています。」

「……訳分かんないわよ。」

秋さんは木から飛び降り、私に近寄ってきた。

「紅葉は、何も実らせない、何も助けない、唯散って土の肥やしになるだけよ。」

「そうですね。」

「私はなにも与えられない、ただそこにあるだけ。」

俯き、自嘲するように呟く秋さん。

「それが何か悪いとでも？」

そう、この討議それ事態には意味はない、重要なのは捉え方である。

「貴方は、全てのものが何かを与えなければならぬとお思いませんか？」

「いや、そうは言わないけど…」

「貴方は、全てのものが何かを与えられなければならないとお思いですか？」

「いや、そうは…」

「生命を嘗めてはいけません、恐らく神である貴方に私がこんなことをいうのは畏れ多いですが、誰にみられなくても勝手に生命は芽

吹きます。」

咲き誇る花は其処に意味など求めません。
ならば、いいんじゃないでしょうか。

第一、

「貴方は、意味はないと言いましたが、意味ならあります。」

「……なにさ？」

「こんなにも綺麗ではないですか。」

単純なそれは理由として絶対なものである。

「私はこれだけ惹かれました、それを貴方はくだらないと笑いますか？」

「そんなことはない！」

「なら、そこに意味はあります。」

「……そっか」

この人が何を抱えているのか私は知らない。

おそらくこの人にとっては大切なもので、譲れないものだったはずである。

「なんかすつきりしたよ、あんがと。」

紅葉のざわめきが少し風いで見えた。

「はい、しっかりと受け取っておきます。」

折角相手が感謝の気持ちを抱いてくれているのだ、貰わないと罰が当たる。

「早苗え、途中で猪狩って来たよ。」

ちようどいいタイミングで声がかかる。
これで、今日の献立は決まった。

「早苗え、夜になったぞ。」

待たせてしまった神様に催促もされた。

「ハイハイ！」

返事をして秋の神様に向き直る。

「偶然にも今夜は大物の猪がとれ、奇遇にも大酒のみを相手どる者が1人でも多く欲しいのです。」

視線を向けると期待に目がかがやいている様子。
俯いていたその顔はもう上を向いていた。

「今夜は鍋ですが、ご一緒にいかがですか？」

紅葉がまた散る。

幻想郷にももうすぐ冬が来る。

来年までさよなら。

手向けの花は暖かい4人での食卓。

稗田あつきゅん探検隊

「ほんとうに？」

「いいさ」

「本当に私が此処でいいの？」

curiosity lived the cat.

宵闇の頃

私は旅にでるのである。

未知を探して、己の不知を埋める為。

亡くすことのないこの思考過程のなか、唯知り得ぬものへと手を伸ばす。

「.....■.....■！」

声が聞こえる。

遠くから近くからキヨリを越えて。

その啼き声は森の中から何処か寂寥を含んで、白薄の狭間まで走り続ける。

ぬえが啼き始めたのはいつ頃からだったか覚えていない

しかし私がこれを始めたのは神無月の九日、子の刻のことである。

その時私はこう考えた。

“ コレはなんなのだろう？ ”

私は私の世界が閉塞して行くのを感じた。

私はすべからく忘れない。

私の人生はつまり私の知っていることしかない世界なのである。

既知のものを知らないものとすることもできず

また不知のものを知っているということも私は良しとしなかった、
つまりは閉塞である。

私の世界は知っていることかしらないものの二元論にしか過ぎなくなっており、その世界のなかでもどうやら私は特別で、知らないものが極端に少ないようであった。

だからこそ私は知りたい。

この啼き声は何なのか、気のせいかもしれないが、私には如何にも助けを求めているような気がしてならなかったのである。

「行きますよ、しの鎬」

「ハイハイ、阿求ちゃん。」

真柢以外の供を連れて夜を出歩くのは初めてである。

なんだってあの黒い塊はいつもならすんなり起きるのに、今日という鎬の夜デビューに起きて来ないのだ。

今日こそは正体を確かめてみせる。

それは、決意であるとともに一種の確信も含んでいた。

その確信の根拠はと問われると、この女性である。

最近我が阿求家の女中になったばかりのこの女性、名を鎬というらしい。

鎬は外来人らしく、女性の癖にとっても背の高い女だった。

また、自身をダイガクセイと名乗っており、外の世界の寺子屋の様な物に通っていたらしい。

知識も豊富で、飄々としながらも理知的な女性であることはその瞳からみてとれた。

“ 今度慧音先生の所にでも顔を見せに行かねば ” とそう私が考えていたのを覚えている。

それはそうとして、此処で何よりも重要なことは、この女性が理知的であるかではなく。

この女性が外来人であるかでもない。

鎬は森の入口で私と出会った。

そしてその時、こう尋ねたのである。

“ 稗田家ってどちらにあるかご存知ですか？ ”

偶然が過ぎやしないだろうか。

無論、その当初鎬とは面識もなかったし、会話などしたこともない。この私が言うのだ、絶対、完全にこの女性との会合など今まで一度もない。

そして、里人の中でこのような女性がない事も分かっていた。

第一、里人の服装ではない。
間違うはずもなかった。

私はこう言った。

“分かりますが、何用ですか？”

恐らく、私の事を稗田家の者とは分かっていないのだろう。
それでもこの人は、目の前の人物が自分の問いかけに答えられると
いう事実喜んでいる様であった。

“ぬえという方から紹介されて・・・”

自分でもよく分からないというように首を傾げ口籠もる。
しかし、その一言が私が一番聞きたいものであった。

そこから私は怒涛の質問を繰り返した。

ぬえに会ったのか？何処で？そこで何をしていたのか？

鎬は一つ一つ答えてくれた。

ぬえは何故私を訪ねろと言ったのか。

“私にはぬえ様からの紹介という部分を伝えて欲しいのだと思えま
した・・・”

鎬はそう言っていた。

一度も正体を見たこともないぬえが如何して？

私は警戒心を覚えた。

これは罠なのかもしれない。

正体を知られることに怒ったぬえが私を消そうとしているのかもしれない。

しかし、この女性が罠だとは如何しても思えなかった。

この目は企むような目ではない。

それより何より、ぬえには鎬と出会える条件下では傷一つ付けられなかっただろう。

鎬には能力があった。

それを無意識にでも使っていたあの状況では、悪意のある妖怪はそもそも出くわす事が出来ない状況だったのである。

という事はぬえは悪意を持っていなかったということになる。

それどころか鎬は命の恩人だと言って恩義を感じていた。

もう訳が分からない、里で恐れられている化物が命の恩人だと？

頭の中に疑問符がたくさんうかんでいた。

「こっちですね。」

鎬はスタスタと進んでいく。

そこに迷いはなく、最初から向かう場所が分かっているかのようだった。

「本当に、便利な能力ですね。」

私はそれについていく。

「そうですかね、使い勝手が悪いような気がします。」

それに苦笑気味に返す鎬。

気付けば、森も少し奥まった所まで来ていた。

「まだですか？」

少し疲れてきた。

我が家の宿命であるが、この虚弱体質が今は憎たらしい。

「もう少しです。」

まだ鎬は余裕がありそうである。

少し息は乱れているが、まだその声には余裕があった。

「こんな事まで頼んでしまつてごめんなさいね。」

そう、鎬は女中である。

稗田家の家事などを世話する者でこういう事は範疇外だ。

「いいんですよ」

健脚振りを見せながら、鎬は語る。

「働かせてもらっている身ですし、それに・・・」

不意に顔を俯かせ口籠もる鎬。

「それに？」

私は問い返す。

「それに、ぬえさんもそれを望んでいるようでしたし。」

そうやって鎬の足は止まった。

「さて、この茂みを越えればそこにぬえさんがいます。」

そうやって指差した先にあるのは一際背の高い茂み。

私は拳を握り込んだ。

「私はここまで。」

分かっている。

そういう約束だったから。

「そこで待っていてね。」

私は鎬を置いて、一人で向かわなくてはならない。

「ぬえは、その人の一番恐怖しているモノに映ります。」

その位の事知っている。

伊達で書物を作っている訳ではない。

「私には、耐えられませんでした・・・」

忠告が途中から自嘲になっている鎬。

「行ってくるわね。」

私は茂みを越えた。

そこには、小さな小さな少女がいた。

「■■■■■■■■■■!!!!!!」

ビリビリビリッッッ!!!

その少女らしからぬ雄たけびは空気を震わせあの特徴的な啼き声を出した。

間違いない、あの少女がぬえである。

啼き声が収まった後も少女はこちらをじっと睨んでいた。

前例の通りならば鎬の言った通り、言葉は通じるのだろうか。

少女は一向に口を開かない。

だから私も迂闊に話しかけられないでいたのだが、すると。

「■■■■■■■■■■!!!!!!」

先程よりも長く、先程よりも大きくその声は響いた。

ッ!

あまりの煩さに耳を抑える。

最早それは音ではなく衝撃だった。

啼き声が収まると再び沈黙。

「お前には私は何に視える？」

まだ耳の中で反響する音にふらつく私のもとにその声は放たれた。
どうやらこのふらつきを恐怖によるものと勘違いしたらしい。

「お前には私はどう映る？」

少女の独白は続く。

「お前には私はどんな化物に視えるんだ？」

少しづつ近付いてくる少女。

その様は愉快そうに笑ってはいたけれど、何処か寂しそうで、何処か諦観を含んでいるようだった。

何なのだその表情は。

「お前には――私には！！」

気付けば声に出していた。

それは私にしては珍しく根拠のないモノだった。

しかし、それは何故か確信を持って言える事だった。

「私には、あなたが見えます。」

左右に異なる翼を生やし、全身黒尽くめのその格好で、闇夜に佇む少女が私には見えた。

「この闇夜の中、風に吹かれて寂しそうに佇むあなたが見えます。」

少女は驚くと何か考え込むようにして指を三本たてた。

「この指は何本だ？」

「三本です。」

「・・・見えてるじゃないか。」

頭を抱えるぬえ。

「だから見えていると言ったじゃありませんか。」

「お前まで私を脅かすのか・・・」

呟くその声は何を意味するのか分からなかった。

「何故だ？私の正体を見た女が私をみれたのは私が能力を使う事を止めたからだ、お前には何で私の姿が見える？」

恐らく鎬の事を言っているのだろう。

そしてこれも当然の事であるのだがそれを答えるなら。

「私が一番恐ろしいものだからです。」

「私自身か？」

自分自身の体を改めて見ているぬえ。

ぬえはその人の一番恐ろしいモノが映るという。

ならば、私がぬえを見たのはつまりそういうことなのだ。

「そうです、私はあなたが一番恐ろしい。」

この少女こそが、ぬえこそが私の一番である。

「何故だ？」

「あなたが未知だからです。」

どんなに力があるうと

どんなに知識があるうと

どんなに狡賢かろうと

恐ろしいが一番ではない

知らない事。

単純なそれが一番恐ろしい。

だからこそ、私は見知らぬ人との出会いそれぞれが恐ろしく、その最たるものであるぬえそれ自身を私が恐怖しているのは私自身納得で、逆に自分の根幹を間違えていなかったことが何より私を安堵させた。

「私は今、とても怖い。」

しかし、それは日常の中に何時だって孕んでいるものなのだ。

自分のおこした行動がどう反響を呼ぶのか恐怖し

周りの人が次の瞬間何をするのかに恐怖する

それは時に称賛であったり、逆に非難であるかもしれない。

何がおきるか分からない。

目が覚めた時に周りに道などない。

ただこれと決め、目印をつけて進んでいく日常が・・・
日々訳も分からず、進んでいた足跡が・・・
振り返れば道となっているのである。

「あなたが、今初めて会ってしまったあなたが。」

日々それぞれに表情をつけ、歩いて行くのは私である。
それぞれの日々に意味などなく、そこに意味を求めるのが人間^{わたし}である。

「私は今、とても怖い。」

何せ人は暢気である。

自分のおこした行動がどう反響を呼ぶのか期待し
周りの人が次の瞬間に何をするのかに期待する
それは時に非難であったり、逆に称賛であるかもしれない。

この楽観的思考こそが、私を私たらしめている由縁であり、それと
同時に証明でもある。

人は日常を踏破していくのだ。

ぬえは私の話を黙って聞いている。

「私はうまく話せていますか？」

私の言葉は私が伝えたい通りの意味であなただに届いているのだろうか。

「私はあなたの意志を正しく理解していますか？」

あなたとのこの会話の中で、判断してきたこの選択は間違っていないか？

「私はただ、それが怖い。」

私の恐怖はそれだけである。

こんなことが私は一番恐ろしい。

日々の繋がりの中で、表情をつける私は、その一日を何も無い一日だったと言いたいだけなのである。

私は何も忘れない、忘れられない。

全ての記憶が私の頭にこびりつき、どうやっても離れない。

一人の人が言った悪口は私の中で永遠に反響されるのである。

「馬鹿が、それが人間なのだろう？」

ぬえが言った。

つまらない日常を這いずって、愚直に真っ直ぐに生きているのが人間だと

「確かに、日々は分からなくて、現実は甘くない。それでも――」

ぬえは私を見据えて言った。

「傷つきながら進んでいけ、人間」

この時にはもう確信していた。

「あなたは、優しい妖怪なんですね。」

今日この日に感謝したい。

私は今日、とても貴重な体験をしている。

「そんなことはない。」

プイッとそっぽ向くぬえ。

怖い噂はあろうが、里で喰われた者はいない。
逆に死傷者が減った位である。

鎬の気持ちは今ならば分かる気がした。

「ありがとうございます。」

私はペコリと頭を下げる。

「お前のそれも大分不粹なんだがな・・・」

頭を掻くぬえ。

「それでも、お前のそれは確かに恐ろしい。」

ぬえはポツリと呟く。

「私を追いかける理由がなんとなく分かったよ。」
「そうですか」

ならばもう私が伝える事はない。

「しかし、駄目だ。」

そういつて私の要求は断られた。

「なぜですか？」

分かってはいたけど、その理由を求める。

「私が正体不明だからだ。」

そう言つて私の前からぬえは姿を消した。

「また遊びに来ますよ。」

向かいの林に呟くようにその言葉を零した。

帰らなくては、鎬が向かいの森で待っている。

「お待たせしました。」

茂みを越えたその先では、鎬が木を背にして胡座をかいて眠っていた。

「おきなさい。」

頬を軽く叩こうとすると――

「どうでしたか？」

鎬はこちらを向いて目を開けた。

寝てなかったな、こいつ。

少し心配そうな声を背に、私は来た道を帰りはじめた。

「待ってくださいよ。」

それを追いかけてくる鎬。

「どうだったんですか？」

何がかの主語が抜けている事を小一時間問い詰めた所だったが、何を聞きたいのかは分かっている。

「会えましたよ。」

「・・・それで？」

息を吞んでいる鎬。

何だ？私が見たと思っているんだ？

「かわいい女の子でしたが、振られてしまいました。」

しかし、諦めない。

人だから。

傷ついても進むのだ。

なんせ人だから。

それはあなたが教えてくれたのだから自業自得でしょう？

「まあ、諦めませんけどね。」

今までいた場所を振り返る。

何処からか不機嫌そうに揺れる茂みの音が聞こえた気がした。

東方忘却録 再

その無聊を穿つ

何とも今日は不思議な客が来た。
永遠亭の御姫様である。

外は雨が降っており、月が少しだけ顔を見せていた。

授業の準備は既に終わっているため、何の気兼ねもない。
お茶請けの煎餅を出して煎茶を淹れる。

ポケットに入れたままでは溶けてしまうので、包みに入ったドロップを机に置いた。

このドロップは――「あなたに少し小言を言いに来たの。」

思考が逸らされる。

蓬莱の姫が私にお小言？

「为什么呢？」

ほぼ蝋燭だけの明かりの室内は何やらおどろおどろしい。

「あなたに会いたがってる人がいるわ。」
「・・・それは誰の事でしょう？」

私にはあまり心当りが無い。

「憎い筈の私に頭まで下げてきたわ。」

思い当たるのが一人いる。

「残念ながら今日は来ていませんね。」

しかし、今日姫の喧嘩相手は不在である。

「だから私が来たのよ。」

意味がよく分からない。

何故本人が来ないのだろう・・・

「あいつはなぜ来ないのですか？」

私はそのまま口に出していた。

「それは教えられないわ。」

姫は楽しそうに笑う。

本当に掴めない人である。

「どういう事なのです？」

「私にもよく分からない。」

なんだそれは？

その返答は私にとって不満に過ぎる。

クスクスと笑う姫様。

何が楽しいのか分からない。

「何が楽しいのですか？」

その様が無故に苛立つ私。

「いいじゃない別に、楽しいから笑うのよ」

そのコロコロとした笑顔は純粋で綺麗ではあったが、嫌悪感しか抱かなかった。

「では私が楽しくないので笑わないでください。」

「どうしたの先生、やけに横暴じゃないか？」

それでも楽しそうに笑うこの女。

確かに私らしくない、なにせ今の私はこの女を殺すイメージまで明確にイメージしていたのだから。

「それじゃあね。」

そう言ってまたわらうと蓬来の姫は帰って行った。

帰る時にちゃっかりお茶請けの煎餅を食べきっていたことにまた腹がたった。

「――あ、また間違えた」

東方忘却録 再（後書き）

読了ありがとうございます。

感想、ご指摘あればよろしくお願いします。

斬れないものはほとんどない

一閃二閃、傷は広がっていった。

「ちゃんと気を付けなよ？」

「すいません、ありがとうございます。」

買い物の帰り、ぬかるみに嵌まっている子猫を見つけた。

「いやいや、いいっていいって。」

思わずあたふたする私。

「買い物の帰りなんですか？」

興味をそそられたのか私の買い物袋に興味を示す橙。

「あっ、秋刀魚ですか」

その瞬間一気に獣の目になる橙。

危ない危ない、思わず買い物袋を隠した。

勢いで隠したけれど、そんな必要がない事に気付いた。

幸う・・・残念なことに最近、家の主人が家にいない。

その間ほとんど備蓄庫が減る事はないのだが、いつ帰ってくるか分からないので困る。

幸い季節は冬の入りであり暖かくないため、腐ることへの心配が少ないのが救いか。

行き先も告げずに出ていくものだから良く分からない。
何故私を連れていけないのか心底疑問だった。

それは置いといて、食料の心配はあまりしなくて良かったのだった。

「今日、食べにくる？白玉楼に今私一人しかないんだ。」
「そうなのですか!？」

せわしなく体を動かし始めた橙。
行きたくてウズウズしているようである。

「いや、今回は遠慮しておきます。」

でも、ニコツと微笑んだ。

「私がそっちにいったら藍様が一人ぼっちになってしまいますので。」
「

「そうなんだ・・・」

もうそんな時期なのか、紫様が冬眠するにはまだ早いと思っていたけど。

まあ、今年が早かったただけか、基本的にあそこの主人は怠惰なのでただ一足早かったただけか。

「それでは失礼します、ありがとうございました。」

ペコリと頭を下げ背を向けて帰って行った。

「いいから、ちゃんと気をつけなよお。」
「ハイイ」

背中に掛けた声に返答があった。

「で、私は一人ぼっちなわけだ。」

白玉楼への帰り道を急いだ。

いつも呼んでいなくとも来る家の主人が呼び掛けに答えなくなつて、どの位たったか。

最初の頃、いつ帰って来てもいいように、きちんと作っていた多めの料理もいつからやめたのだったか。

庭師としては、それを見る相手がいない事がとても悔しかった。なにより、自分を置いて行った主人が許せなかった。

自分に出来ることはただいつ帰ってきてもいいように此処を保つことだけ、そんなのは嫌だった。

「今日は鍋にしよう。」

手の込んだ料理など面倒くさい。

私はこんなにも怠惰だったか。

少しづつ自分が死んで行く気がする。

外延より出で後に我が核心を蝕むが如く。

私は恐ろしく見事に空洞になっていく。

適当なだけ野菜を切り、肉を入れていく。

他に人のいない食卓のなんと寂しいことか。

うちの主人はあれこれとうるさかったからそれはなおさらであろう。

そろそろ食べ頃である。

箸をつけようとしたその時。

「よう、やってるかい？」

突然、縁側の扉が開いた。

「・・・なんのよう？」

そこには白黒の魔法使いがいた。

「つれないねえ。」

どっこいしょと私の隣に座った。

「ほら。」

私に手に向けてきた、ご飯をたかりに来たようである。

「ちょっと待ってて。」

台所に向かい一組の椀と箸を持ってくる。

「遅いぜ、妖夢。」

敵は私の箸とお椀を持ってモシヤモシヤと鍋を食べていた。

「ハア、いただきます。」

食べはじめたが会話はあまり弾まなかった。
黙々と自分の家の食卓の如く食べ進む魔理沙。

「妖夢、野菜とってくれ。」

お椀を渡してくる、なんだこの人は。

「なにがいいの？」

結局おさんどんを引き受ける私。

「椎茸を頼むぜ」

「そんなピンポイントに・・・」

鍋にそんな大層な量、椎茸なんていれてねえよ。

「いつから、あんたの主人はいなくなったんだ？」

空気が凍った。

人にこのことを喋ったことなどない。

いずれ帰ってくる、そう思い続けて今まで周りに助けを求める程のことじゃないと自分に言い聞かせてきた。

気付いた時には手遅れで、もうここに追いかける為の痕跡などない。
ただ整然とした主人の部屋がそこには広がるのみである。

「そんなに長いわけじゃないわ。」

しかし、私の口はそれを隠そうとすることはなかった。

「精々、二、三週間程度。」

口は驚くほどにスラスラ動く

どうやら自分は誰かにこのことを知ってもらいたかった様である。

「その間、一度でも？」

「帰って来てはいない。」

「・・・そうか。」

再び会話に沈黙が降りた。

先程と違うのは、互いの箸は全く動かなくなっていた。

「それで？ 今どんな心境？」

一瞬、この女を殺してやろうかと思った。

「心境・・・とは？」

分かり切っていることを聞く。

質問をしてきた少女の顔はニヤニヤといやらしい笑みを顔に浮かべていた。

「だから、主人に捨てられた心境だよ。」

瞬間、刃先を魔理沙の首筋ピッタリにくっつけていた。

「その言葉はある程度正しくはあるけど、正鵠を射てはいない。」

捨てられてなどいない、その言葉は出てこなかった。

日に日にその不安は大きくなっていったから。

的確なその言葉は私の中を効率的に、実に的確に抉った。

しかしその言葉が完全な答えではない

「確かに私は捨てられた。」

刃を鞘に直す。

少女は、少しも恐れていなかった。

瞬きもせず押し当てられた刃を、そして押し当てた私をずっと見続けていた。

「しかし、あの人はここに帰ってきます。」

あの人にとっての家は間違いなく此処であり、それは揺らぐことがない、もし違えることがあるとすれば、その時は私が荷物をまとめ去る時のみである。

「帰ってくれば今まで通り、忙しい日常も戻ってくるのでしよう。」

いつもへらへらしている私の主人はそんなことで揺らいだりしない。

「それでも、私は悔しい。」

主人が黙って出かける時は必ず何かが起きている。

それなのに――

「何故今、私はあの人のおそばにいないのか。」

「何故私を連れて行ってくれなかったのか。」

「私はあの人につかえているのに今何をしているのか。」

次々と生まれる言葉は濁流のように流れていく。

「あの人に置いて行かれた、それが悔しい。」

別にこの言葉は誰かに充てたものではない。

今まで溜めていた泥が一気に放出されたただの独白。

「それで？ あんたはどうしたい？」

少女は未だにニヤニヤとしていた。

「あの人のそばにいたい。」

それはすんなりと、随分あっさりとでた答えだった。

「主人が危険に晒されている中で、一人のうのと生きていたくない。」

そう、答えは簡単に出るのである。

問題はその解に辿り着いてから。

「なら、会いに行けばいい。」

実に単純明快に物事の回答を出してくれる少女。

「無理です。」

しかし、それにはそう答えるしかないのである。

「なんでさ？」

その疑問も最も。

「あの人はとても聡くて、優しい。」

いつもはおちやらけている、面倒くさがり屋だし、食費おぼけである。

それでも――

「あの人は本当に危険な時私を巻き込みません。」

間違いなく、私の仕えるべき、唯一無二の主人なのである。

「そして、人知れず解決して帰ってくるのでしょう。」

それぐらい家の主人には当然である。

「本当は分かっているの。」

あの主人が何も悪くないことを。

家の主人は優しく、大事な所で一人で背負いこもうとする癖がある。

「本当に許せないのは、あの人に足手まといと思わせてしまった私自身。」

だから、あの人が私を足手まといと判断したのなら、私は一分の余地もなく足手まといなのである。

「私は自分の弱さが憎い。」

今までのことは、それをいじけて不貞腐れていただけ。

「あの人の刀でありたいと思い続けて、それが叶わないのが如何にも悔しくて堪らない。」

それでも、意地として込み上げる涙は魔理沙には見せなかった。そこで、やっと魔理沙が口を開いた。

「妖夢、私もこう見えて怒ってるんだぜ？」

慟猛な笑みを浮かべる魔理沙。

「最初は黙って苦しんでいたお前に、次にそれを気付けなかった私自身に、でも今は新しいムカツク奴が現れがった。」

立ち上がり、私に手を伸ばす魔法使い。

「ぶん殴りにいくぞ妖夢。」

「だ・・・誰をですか？」

予測は付いている、この娘はそんなぶっ飛んだことを考える少女だ。

「決まってるだろ？あんたを・・・私の親友を此処まで虚仮にしたあんたの主人をだよ。」

この娘には当てがあるんだろうか。

きつとない、多分ない、いや確信をもって言わせてもらうがない！それでも、あてのない旅でも、この娘は一緒に行こうと言ってくれた。

私に手を差し伸べてモノクロの魔法使いは言った。

「顔面に一発、ぶちかましてやろうぜ。」

そういつて不敵な笑みを浮かべた。

今までの経験則が知っている、この笑顔の時のこの少女に、不可能なんてないのだ。

“魔法使いになる”

そういつて人里を飛び出したあの日も少女は同じ笑みを浮かべていた。

不可能だ、そう言われ続けていたことへの反撃だった。

血反吐を吐き、倒れたことが何回あったか、四肢が断絶するような痛みを今まで何度味わったか。

私は知っている、この少女の足跡はまさしく血の一滴一滴なのである。

まだ年端もいかない少女が一人きりで生活をしていくことがどんなに大変だったか。

ゼロからのスタートだった少女は走り続けた。

才能も無く、教え導く師も持てず、何もなかった少女は努力し続けた。

そして今少女は魔法使いになっている。

「大丈夫、私も一緒に行く。」

そう言って立ち止まった私を引っ張ってでも走らせる。

この少女は誰よりも負けず嫌いで、誰よりも努力家で、立ち止まるのが大嫌いなのだ。

そしてこの少女の一番たちが悪いところは――

「だから、こんなところで立ち止まってんな。」

こうやって周りにも立ち止まることを許してくれないこと。

「こんなところでウジウジ腐ってんな。」

どんなに嫌がってもこの親友は私のことを走らせ続けてくれるのである。

こんな風に不敵なニヤリとした笑みを浮かべて。

「さっさと行こうぜ。」

伸ばされた腕は私の目を捉えて離さなかった。

面倒くさい程感情が溢れてきたけれど、それはとりあえずこの一言に込めることにした。

「殴りとばすのは私が最初だからね？」

とった手は力強くて、再び泣きそうになったことは秘密である。

斬れないものはほとんどない（後書き）

読んでいただきありがとうございます、感想、ご指摘などありましたらよろしく願います。

死点にて（前書き）

感想・ご指摘がありましたらうれしいです。
今回は眠くなってしまうかもしれませんが、大丈夫というかたはお読みください。

死点にて

世界が平等である程、弱者は増えていった。

チーン

涼やかな音が響いた。

「南無妙法蓮華経。」

ここは人が別れを告げる場所。

現実から非現実へ移行するための通過儀礼である。

「是不可思議。」

人と人とのつながりの果てに、終えた想いを、後味の良いものにする魔法の特効薬。

「以何因縁。」

全ては残された人達の為に。

チーン

空気が冷える。

それは場所を引き締め、人々の意識に違和感を与える。その差異こそが人々に別れを意識させるのであろう。

「於是弥勒菩薩。」

迷いは何時だって難敵である。
憂いは何処までも無意味である。

「如我惟忖。」

ただそこに生か死があるだけ。
受け入れる云々ではなく、ただ零か壺かである。

「為求声聞者。」

死は平等であり、それゆえに無情だ。
全ての人が受け入れることはない。
人々の其処にあるのは諦観である。

「究竟涅槃。」

だからこそ人はその先を求めるのである。
薄暮のその先を
目を閉じてしまってもその先に何かがあると信じられるから。
人々は強い。

「無有一人。」

しかし旅路は一人。
慈悲も善意もなく、かといって脅威も悪意もない道の始まり。

「若身若心。」

間の際に顧みることは遅く、人生生き急ぐ勿れ。
身に染み着いたこの業を先に残す事勿れ。

「日月燈明仏。」

この儀式は死者に捧げるものではない。
ただ、その先に旅立つ為の決別の一句である。

「於大衆中。」

だからこそ、この大衆の中に於いて、迷い出ずる事勿れ。
決して迷う事勿れ。
と囁き続けるのだろう。

「而説偈言。」

チーン

「本日はご愁傷様でした。」

振り返って頭を下げる。

親族一同、それに近い方々皆が涙する中、葬儀はしめやかに行われた。

すっかり夜となり、雨が降る帰り道を私は帰っていた。
風が強く、手に持った提灯は如何にも心許ない。

きいきいと軋むそれはぼんやりと先の道を照らしていた。

もう遅いからと引き止められはしたものの、私は断って出てきてしまった次第である。

それというのも私が原因なのだから仕方がない。

その人達に向けて言うことはなかったけれども、死体と一夜を過ごすことなど考えられない。

その昔、死体が攫われるとされ、葬儀が終わるまでは蠟燭の明かりを絶やすな、など様々の伝承があったが、今はその実物が地下に幽閉されているらしいので気にしなくてもよろしい。

しかし、葬儀の後ですぐ埋めることが出来なかった事はその家族に起因するのである。

棺に入っていたのはまだ年端もいかない子供であった。

友達もたくさん来ていた。

その中に小さな少女に寄り添う鬼の姿を見つけた時は驚いた。

鬼は私を睨みつけるように見ていたが、どういう意図があったのかは分からない。

私が望んでいたものが目の前にあった。

人間も妖怪も平等に暮らせる世界。

私があればど渴望した現状が、一つの間違った形であった事は大きな誤算であった。

なんと素晴らしいお題目を掲げたものだろうか。

説法家であるが故にその意味が素晴らしく腹立たしい。

それは置いておくとして、家族はその少年の体にしがみつき、離そうとしなかったのである。

魂のない骸は霊に入りこまれ死霊と化す事がある。

その言葉もなんのその、家族は少年に覆いかぶさるように抱きつき、私は帰宅する道を選んだ。

ともかく蠟燭の火を消さないでさえいてくれればいい。

葬儀は二回に分けて行われるものとなっていた。

これも葬儀の一つの方法である。

非情だと言う勿れ。

気味が悪いものは仕方ないのだ。

昔はそんなことはなかった。

しかし、ある時から、自分の経を送った人の顔を見ることができなくなった。

私も一人の人間である。

死体に忌避感を感じるのは当然の事であると言い聞かせた。
その思考の刹那。

「もし――」

何処からか声が掛かった。

いいしれぬ闇の中、灯りを探すが徒勞に終わる。

「もし――」

また聞こえた。

しかし、視線を何処にやっても虚しく空を斬るばかりである。

「何方どなたです」

私は闇に向けて声を掛ける。
如何にも嫌な予感がしていた。

「灯りがなく里に帰れなくなってしまいました。」

声はくぐもっておりその響く声の頃から見ても老婆と踏んだ。
しわがれたようなその声は闇の中から聞こえる。

「そうですか、それでは里にお送りしましょう。」

声は不思議な事に何処から聞こえてくるものか分からなかった。
提灯を前に向ける。

しかしその声の主の姿は何処にもなく。
ただ目の前にある木の幹が姿を晒すだけ。

「どうしたのですか、さあ行きましょう。」

その声は空に消えなかなか姿を現さない。
自分は質の悪い化生に捕まってしまったか。

「もしー」

もう一度その声が響いた。

「どうしましたか」

「幹に躓いて足を挫きました、運んではくれませんか？」

灯りは木の幹を確かに照らしていた。
誰もいない木の幹を。

「姿が見えないようですが。」

しとしとと雨が降っている。

葉脈を伝いゆっくりと落ちるものだから。

サーサーとは降らない。

実にゆっくりと、少しずつ体積を増し、降り注ぐ。
何時の間にか辺りを霧が包み始めていた。

「そうなのです、私はもう姿がない。」

その声は止まることなくその先を告げた。

「だから、載せて行ってください。」

一人では行けないと、負ぶさらせてくださいと。

「いいでしょう、幸い私は身軽です。」

私を包むものはこの装束一つなのである。
手に持つ提灯は頼りなさげに揺れていた。

「ありがとうございます。」

そうしてその声は体積を持って私に負ぶさった。

「それでは行きましょう。」

来た道に戻る。

里の方へ、もう半分程も来た道に戻る。

「諸仏智慧。」

経を唱えさせて戴こう。

少しづつ、ゆっくりと、经文が唱え終わる頃には里についている事だろう。

「甚深無量。」

信仰を捧げる。

「其智慧門。」

この世を憂う人々の歌。

「難解難入。」

世は全て事もなく。

「一切声聞。」

人々は安寧に暮らし。

「辟支仏。」

手を取り合って暮らしていく。

「所不能知。」

それが無理だと実感した祈りの歌。

「所以者何。」

身に染みついた者だから口は勝手に動き、音を刻んでいく。

「それ以上口を開くな。」

その声は突然背中から掛かった。
無が実を結び、そこに有が生まれる。
背中には明確な重みが存在していた。

「どうしてでしょう。」

その声の主へ声を掛ける。

「その声に反吐が出るからだ。」

声の主は幼く、またその実態もそのような輪郭を結んでいた。

「あなたは、朱点のですか。」

「そんな古い名前で呼ぶ奴なんざ今の幻想郷にはいないさ。」

そう言うとき私の背中から飛び降り、私の前に進み出る。

私の目を見つけて一息、後に――

「その口から出るものは何だ」

いきなりの問答である。

確かにこの鬼、その昔もこんな事をしていたのだから不思議ではない。

元の伝承では幼くして成人の知識を持っていたというのだから。

「言の葉でございます。」

凜として答えなければならない。

「その意図は」

向き直り気を静める。

「私の内を外に出すものかと。」

相手は鬼だ、一度間違えばこの身は果てるだろう。

「先の声は」

雨の降る山道、ここが橋の袂であったのなら返す答えも分かるうが。

「信を貫く言霊なり」

生憎と私は武士ではないのでそこで話は終わりである。

「その数は」

何とも即席にしては際どい所を聞く。

「惑いし人を導く灯なり」

なればこそ、思考を空にする。

「その真意は」

問答とは、自分の内への問い掛けを他人の助けを借りて答えるもの。

「信心して文を唱えることなり」

その瞬間相手の問い掛けは止まった。

「それだ腐れ坊主。」

私は罵倒されたことよりも相手の真意が分からない事に戸惑った。

「“それ”・・・とは？」

考えれども己の内に答えは出ない。

「もう一度問う、信仰とはなんだ。」

その声は降り続ける雨の中でも真っ直ぐに私に届いた。

「信心をして経を唱える事です。」

私は先程と同じ意図を返す。

「なら、お前は何だ？」

・・・

「お前のそれは唯の文章だ。」

吐き捨てる様にその言葉は投げ掛けられた。

「人々はお前に何を求める？」

その問い掛けに私は直ぐに答えられない。

「あの場は人々に何を求めるんだ？」

そう、あの特殊な場所は人々に何を^{もたら}齎すのか。
その答えが如何にも出せない。

「決まっているだろう、その人の無事だ。」

あの場では、人々が涙を流し別れを惜しむ。

「この先の旅路で不幸のないように。」

それが不安だからこそ、あの時に人々は離れるのを惜しんだ。

「どうか安楽でいられる様に。」

辛い思いをしたのだから、せめてその先は穏やかでいられるように。

「自分一人が願う事は恐ろしいから。」

儚い願いなど塵芥の様で、心細い。

「悲しみを分かち合う為に。」

だからこそ、人を集め、此処にいた事を示すのだ。

「自分の残した跡を証明するために。」

その人が生きた事は決して無駄じゃない事を証明する為に。

「あの場所は人々に信心を求める。」

びしょ濡れになりながら、それすらも厭わず鬼はこちらを見据えていた。

「では、お前が求められていたものは何だ？」

考える、私に何時の間にか欠けていたものが指摘されている。

「経を唱えることか？」

その声は実に苛立たしげで、今にも拳を振りかぶりそうな怒気を孕んでいた。

「鈴を鳴らすことか？」

声は少しづつ大きくなる。

「違う!!!!!!」

大声が雨の中響いた。

「その場所でお前は何をしていた？」

つまりはこの鬼が怒った理由はそれである。

「お前に求められていたものはなんだ？」

私が最低の事をしたと罵倒しに来たのだ。

「ただその人の幸福を願うことじゃないか。」

傍目から見えていたら私自身もそう思った事だろう。

「お前が僧だとかそんなことは関係ないんだ。」

私が死人から目を背けたくなった原因。

「お前が経を唱えられる事なんて関係ないんだ。」

それは僧である以前に、当然のものとして求められていたものだったのに。

「お前が呼ばれたのはあそこにいた小さな子供がその先幸せに暮らせるように祈る為じゃないか。」

私は人の先を願っていなかった。

ただその場限りのものとして、鈴を鳴らし、迷い出づるなと願うばかりであった。

「何故坊さんがあの場に呼ばれると思う？」

其処に至るのか。

「お前達が日々願っているからだ。」

自分の来世での平穩を。

「人々を救いたいと、毎日願っているからだ。」

他が我を助くと知っているから。

「人々が自分が生きる事に精一杯になっている時にも、お前達は救いを願っているから。」

出来る事もせずに。

「自分が祈るよりもお前達に祈ってもらった方が徳が高いと思うんだ。」

祈る事しかできないのだから。

「家族が祈るよりも幸せになれると信じるから。」

自分では出来ない悔しさを滲ませて。

「他人であるお前に助けを求めるんだ。」

その私がした事はなんだったか。

「お前達は普通の人だ、経が読めるだけの、何処も変わらない人。」
人々は平等である。

「しかし、お前達が願う方が徳が高いんだと。」
それを願ったはずなのに。

「どうだ、これが平等か？」

平等は是程^{これほど}までに遠くなった。
故に、人と妖怪は相容れないのである。

人は祈るもので、妖怪は其処に或るものだから。

目指す形を間違えながらも、其処に救いはあるのだと祈った。

・・・

「ありがとうございます。」

自然とその言葉は出ていた。

「一つだけ言わせてください。」

私はこの空気に終止符を打つ事にしよう。

「人間をなめるな。」

鬼は私の反応に眉を顰めた。

「あの場が何を求めるのか。」

私は論破などされていない。

「決まっているでしょう。」

人はそんなに弱くない。

「残していく人への手向けです。」

確かに人が死ぬのは悲しいことだけれど。

「自分が先だって申し訳ない。」

後悔が深いのはきっとお互い様のはずだから。

「もっとこうしていたかったのに。」

未練や後悔を残してしまうこともある。

「そんな想いを抱くからこそ、死を明確にし、旅立つのです。」

だからこそ、私がいる。

「そしてそんな後悔を抱いている自分を恐れさせないために、現世にて迷うなど私は囁き続けるのです。」

迷うのではなくその真意はここに留まる人達の為に。

「全ての事に意味などなく、正しく私達は経文を読みに来ているのです。」

生は厳しく常に別れを伴うものだから。

「経文を読み、鈴を鳴らし、それらしい事をするために私は来ているのです。」

悲しむなどと言わない。

「僧は唯の人です、特殊な力なんて当然なく、特別な祈りが出来る訳ではありません。」

悲しむ声はきつと届く。

「しかし、経は読めるのです。」

確証などなくてもそうだと思うから。

「鈴を鳴らし人々に知らせる事は出来るのです。」

私は出来ることをする。

「特に力などなくても人を救えるのです。」

其処には安易な呵責など介在してはいけない。

「私がなにか間違っていますか？」

今度は私が問いかける番だった。

鬼はフンと息をつくと睨みつけた。

「詭弁だ。」

吐き捨てられた言葉は雨と一緒に地面に落ちて行った。

「そうですとも。」

実際鬼に指摘された通りなのだ。

私は経を読む事を考え故人の幸せを十分に祈らなかった。

それが気に食わなかったのだろう。

根幹を見失っていたと言える。

最も大切なこと。

私は、その人の冥福を心から祈ることを怠った。

经文が唱えられる事よりも、その人の事を心から祈ることが一番であつたのに。

「ありがとうございます。」

私は再度礼を贈る。

「態度で示せ。」

鬼は実利主義だ、言葉の力を信用しなければ過信もしていない。

「分かっています。」

だからこそ、あんな事を言ったのだ。

相手と対等に意見するために必要な事は、こちらにも意見を述べる事。

所感を交え初めて論議となる。

そして互いに言いたいことがあるからこそ、何かはその何かと対等に向き合う。

「では行動で示させていただきます。」

私は私の間違いを受け入れ感謝する。

その相手は妖怪である。

「もちろん聞いてくれるのですよね？」

向けた対象は呆れた顔をしながらも勝手にしろと里への道を歩き始めた。

それを追いかける。

かつてそうなりたいたいと思い、叶うことのなかった偶像。

それは相容れなくて間違ったモノだったけれど。

間違った形でもいい。

こうして話しが出来て、互いに誰かの事を想いあえていれば。

「南無妙法蓮華經」

それが私の望むものだから。

死点にて（後書き）

死というのはどうにも難しいものですね。

作者もその関係の者なのでいろいろと考えることがあります。

死者を送り出すため、死者の平穏を祈るため、しかしこの行為には自己満足の含まれている部分が多分にあり、だからこそ、ままならないのだと思います。

でもきつと日本語は繊細ですから、単純な言葉で表すことが出来るかもしれません、しかし、作者には文章力があまりなくうまい言葉では表現できません。

死とは本当にままならないものです。

鴉（前書き）

今回は少し長いです。

鴉

過程を抜いた事実の暴露

「随分と死んだねえ。」

まさに惨状である。

無縁塚には夥^{おびただ}しい数の死体が流れ着いていた。

沢山の死体、既に腐っているものもある。

「今日は大仕事になりそうだ。」

腕捲りをして私は死の冒瀡にのりだした。

男・女・老人から子供に至るまで、沢山の人が流れ着いている。

「外で何か大きな災害でもあったかな。」

死因も様々、溺死、焼死、出血死、なんでもござれだ。

人の衣服を剥ぎ取り、使えるものは全てを奪い、用が済んだものはより分けて放置。

腐ったものの衣服は臭うのでものだけ剥ぎ取る。

小さな子供はほとんど価値のあるものは持っていないので衣服を剥ぎ取って終わり。

推測は正しいだろう。
災厄が起こったのだ。
時折、玉などを入った包みを抱えて死んでいるものがちらほら。

全てを奪う

その人が精一杯努力して手に入れた結晶はいともたやすく私の手に渡った。

今の僕はとんだ恥晒しであり、生命の面汚しであろう。

関係ない、全てを奪わせてもらう。

冷え切った体達は自分から生命としての体温を奪い取っていく様であつた。

「精がでるねえ。」

その声は唐突に聞こえた。

「死神のお姉さんかい。」

見ると其処には着物を着崩した女性がいた。
だらしなさとしては幻想郷で1位の名を欲しいままにするであろう
このお嬢さんなら、突然現れたことも頷ける。
ちなみに2位は家に強盗を仕掛けに来る白黒である。

「そうです、私が死神のお姉さんです。」

嬉しそうにウィンクをするが流す。

「だっふんだ。」

全て流す

「なんだい、つれないねえ。」

お姉さんは少し残念そうにした後で剥ぎ取られた死体達の並ぶその場所を眺めて行った。

「相変わらず、丁寧なもんだね。」

褒め言葉でないことだけは確かである。

この娘はいつも僕を見ると、難癖をつけてくる。しかし、それにしても手を出してきた事はない。

「これだけの死体だ、そんなに丁寧にやってたら終わらないよ。」

死神はニヤニヤと笑っている。

僕が諦めるのを待っているのだ。

「終わるまでやるさ、何日でも通ってね。」

得になると分かっているのだ、通わない方がどうかしている。

「そうかい。」

死神はたちまちいやらしい笑みをやめ、気怠そうに肩に鎌を担いだ。

「暇だから見物させてもらうよ。」

そういつて近場にあった手頃な石に腰かける。

仕事は大丈夫なんだろうか。

「好きにするといい、死体には手を触れないでくれよ。」

「死神にそれを言うのかい？」

鼻で笑って流されてしまった。

「これは僕の仕事だ。」

まだ沢山いる。

低かった日は頭上にまで来ようとしていた。

「あんた、如何してこんな事できるんだい？」

投げ掛けられた質問はもう何度も繰り返し聞かれて来たものだった。
既に日は暮れ、辺りは薄暮の巷である。

「決まっているじゃないか、売るんだよ。」

死者が着ていた服だから、忌避されるところか。

大丈夫、そんなへまは犯さない。

僕が売るのは個ではなく問屋である。

問屋と口裏を合わせているのであればる事はない。

「少しだけ、話をしてやるよ。」

夕方になってもまだいるこの死神、仕事は本当に大丈夫なんだろうか。

「片手間でよければ。」

僕は腐りかけている男性を運びながら声を掛けた。

うわっ、目玉が落ちた。

「私達が着ているこの世のありとあらゆる服は、全てが死に装束だ
って話した。」

「それは興味深いね。」

スッ

死体を置き、手を合わせた。

話半分にしか聞かない。

「もちろん生者に限った話だけれど、人の一生を長い目で見た時、
それはその人の一日になるんだと。」

死神は手を弄りながら話していく。

両者片手間である。

「長い、短い、感じ方は人それぞれで、いつ眠ることになるかわからない。」

終わりがあるという事は基本的に生者に許された特権だから。

「その時、いつか終わりを迎え、永い眠りが訪れた時、その時着ていた服がその人の本当の死に装束となる。」

まあ、この人達もそんなこと考えてなかっただろうけど、とカラカラ笑う死神。

「なら僕はその装束で旅立とうとする人々を裸に引ん？いて放りだしている訳だ。」

今度は、老人の死体から衣服を剥いだ。
骨ばっていて脱がすのが難しい。

「その通りだね。」

澄ました顔の死神。

視線は俯かせたまま、こちらを見ようとしなない。

「なんとわれようが僕はやめないよ。」

女性の薬指に嵌まっている指輪を盗る。

首に掛かっている飾り物を、お爺さんの歯から金属を。

全て
完璧に

必要なものは全部奪う。

「売れるんだからね。」

僕は商人なのだから、売れるものは売る。

死人が着ていようが、新品だろうが関係ない。

ぼろいモノは安く売れ、いいものは高く売れる。
そこにあるのはそれだけである。

「本当にご苦労なことだ。」

呟くような声でその声が聞こえた。

「率直に言おう。」

遂に死神は重い腰をあげる。

しかし、彼女は僕の事は一つも見ようとはしなかった。

「あんたは死人から大切なものを奪う鴉だ。」

よく僕の事をわかっていらっしゃるようである。

「あんたが奪った結婚指輪、その人が恋人からもらった首飾り、食べる喜びをくれたその齒、全てをあんたは根こそぎ奪う。」

何も否定の余地はない。

「ものは記憶を持つんだ、一度積み重ねられ、蓄積されていたそ

の記憶達は時には生命をまねる事だってある。」

「僕の知りあいにも一人いるよ。」

知りあいと言ってしまったては彼女は嫌がるかもしれないが。

「そんな記憶をあんたは否定する。」

この死神は僕が死を冒瀆していることが許せないのだ。

「あんたはこの世界に存在する数ある恥晒しの行動の中で、最もクソみたいな事をしている。」

分かっている、彼女はああ見えて死者への礼節を弁えている。

だからこそ、死者の話を聞き、苦悩、願望、無念、後悔、それら全てを受け止めて、穏やかに川を渡す事ができるのだろう。

「自覚している。」

自分の行う事が死者をどんなに辱めていることか。
存在としての価値が低いのだ。

自分は商人ですらないのかもしれない。
ただ死体から服を剥ぎ、それを売っているだけだから。

「じゃあ逆に質問させてくれ。」

今度は僕が話す番だろう。

相変わらず目線があうことはないが。

「その証拠はどこにあるんだい？ その記憶達が積もる所は僕のこのつまらない目でもみえるのかな？」

くだらないことを言っていると自分でも自覚している。

「思い出なんて形のないモノが、その思いをもった本人が死んでしまったあとでも有効だとても？」

思いとはその人が抱くものであって、何かに降り積もったり蓄積されていくものではない。

帯びていくものだ。

その時抱いたものは、其処に溜まることなく、その残滓だけ残して消えていく。

そして其処に残るのは、ただそんな記憶があったという事実を帯びた商品だ。

「あんなものは例え話だ、私は過程の話をしている。」

もの達にも今に至るまでの記憶があり、そしてその過程がある事を自覚せよと。

「そのもしもを失くしてしまった時、人は人ではなくなるから。」

随分と中身のない話しをするものだ、どうやら今までの話しは僕に向けるの話しではなかったらしい。

正確には半分ほど。

「そうかい、それは大変だ。しかし、その話しはどうやら話し相手を間違えているようだね。僕には半分しか関係ない。」

一気に白けてしまった。

もうどうでも良くなったといってもいい。

「分かってる。」

しかし、それを遮るように声は続いた。

「でも、だからこそあんたにしておかないといけない話だと思う。」

その真意は分からない、そして分かりたくもない。
もちろん、手を休めることもない。

作業は順調に進み、死体も残り少なくなっていた。

「そうかい。」

同じ返答しか返さない。

この死神と話しているとこれがお前だと自分を見せつけられている気分になる。

それがとても嫌なのに、この死神は何時だって僕に会いに来るのだ。
本人だって嫌だろうに。

そして、手を下せば簡単に解決するようなものをただ見ているだけなのだ。

「最近、死人の数が減ってね。」

そこで突然話題は変わった。

「この時期だと風邪を^{こじ}挟らせる子供が多かったんだが・・・」

死神は夕日に向かって佇んでいる。

それから突然クルリと向き直ってこちらを向いた。

「如何してだと思おう？」

この時、今日初めて、死神と目が合った。

「知らないね。」

そんなこと知るわけがない。

「亡霊に聞けば、食べ物食べられなくなった人がまたおいしく食べられるようになったとか。」

話題がとびとびである。

「何でだろうねえ？」

なぜこうも追い詰めるようなものいいのだろうか。

「だから、知らないよ。」

僕には関係のない話である。

「他にも、色々あるんだけど、あんた――」

彼女の目は完璧に猛禽が獲物に向ける目であった。

「あんた、死人の服だからと二束三文で問屋に売ってるようじゃないか。」

舌舐めずりをして待ち構えるような空気。

「ご丁寧に売る時にも格安にするなんて約束まで取り付けて。」

思わず竦みそうになってしまいが取り敢えず耐えた。

「そんなことしたらこんな危険な所にきて一日費やしたあんたの利益はどこにいくんだい？」

怒りの矛先がどうやら違った様である。

その言葉を対し目を背けようとするが、なんとも凄まじい雰囲気を感じて死神は放っており、僕が目を逸らす事を許さなかった。

「私は努力が報われないのが大嫌いだ。」

死者の無念を聞くからか、死者の後悔を聞くからか。

この死神は如何にも生に対して生真面目だった。

世間とはそんなものであるのに、世は正直者が馬鹿を見て狡賢いものが生き残る時代である。

「苦労にはそれなりの対価が必要だと思おうし、そうじゃなければ嘘だ。」

そんな中この死神は言うのだ。

努力には対価を、傲慢には破滅をと。

「だからあんたが気に入らない。」

何とも自分勝手だ。

そして、自分勝手だからこそ、その考えは尊い。順序立てて説明してもらったが結局の所。

「君、僕のことを嫌いだろう。」

まあ元から分かっていた事である。
いまさら確認する必要もないのだが・・・

「あら、ばれちゃった。」

なんともそしらじらしい。

死神はわあと両手を広げ驚いている素振りをとった。
あくまで素振りだけである。

「少ないながらも利をとる、それが商売だよ。」

其処に商品があればどんな所でも。

「だから、その利が釣り合わないと言っている。」

その利はとも少なく、残るのは僅か。

「あんたはいつ自分が誰か分からなくなるようなこんな危険な場所
で死者の服をあさり宝石を奪う。」

利は正直何もしないのと何も変わらない。

「でも何もボロイ商売じゃない、あんたのそれは命がけだ。」

そんな事に命を懸ける価値があるのか、そう死神は問うている。

「だから、それでも行くのが商人なんだって。」

例えそんなものでも、そんなものの積み重ねが今の自分である。それは誰にも否定させないし、話題にもしない。

「あんたはもっと高い代価をもらわなければならない。」

なんだ？

僕に死者の冒流をやめろと言った女が、もっと高い代価をもらえと言っている。

「じゃあ、僕がもっと高い代価を貰えば、君は消えてくれるのかい？」

値をあげるつもりなど毛頭ない。

商才など関係なくこれは意地の問題であるのだ。

「まさか、そうになったら私は迷い無くあんたを殺すよ。」

じゃあどうしろというのだ。

死神の目は本気の日だった。

「あんたは里の人に疎まれ、避けられ、忌避されている。こんなに里の為に行動しているのにだ、私にはそれが悔しい。」

里の者で僕にふつうに話してくれるのは霧雨のおやっさんか慧音位の者だろうか

「言っただろう、そんなものただの結果だ、自分のやっている事に変わりはないよ。」

もちろん、僕の事を気にしているわけではない。

この死神はそういう不義理がただ許せないだけなのだ。

「だからそれを止めろと言ってるんだ。」

死神はどうあっても僕にこの行為を止めさせたいらしかった。

「なあ、もう一度聞くとよ、本気の問いだ。」

一呼吸後、その問いは放たれた。

「あんたは里人の為に、自分が犠牲になろうと思ったのかい？」

死神の声が響いた。

その瞬間――

気付けば、涙が溢れて来た。

今までどんなに苦しかっただろう。

何度やめようと思ったか。

「やっと……。」

本当はこんな仕事したくはなかった。

それでも、子供たちが、里の人が苦しんでいた。

「やっと、理解してくれる人が来てくれたんだね。」

それを遂に理解してくれる人があらわれた。

僕の苦労は報われた。

「辛かったよ。」

里の皆に全てを話そう。

「その通りだ。」

皆の足りないと言った服は自分が揃えていた。

皆の為にどれだけ苦労したか。

皆の為にどれだけ危険な目にあったか。

「これで終われる。」

「なんて言うと思ったかい？」

冗談ではない。

今の質問は僕に対する罵倒に他ならない。

「何度でも言おう、僕は誰も救おうなんて思っていない。」

どんな事を言われても受け流してきた僕が其処だけは譲れなかった。そんな尊い事を僕が出来る筈がない。

「身を投げ出して人を救うなんて馬鹿のする事さ。」

自分がいなくなっても、皆が無事ならそれでいい。

そんな事を言う者などこの世界の何処にいてもいけない。

そんなの死神じゃなくても、気持ち悪くてたまらない。

「わかってるならそれでいい。」

少し嬉しそうにして死神は肩に架けていた鎌を先程まで座っていたその場所に置いた。

「あゝあ、殺し損ねちゃった。」

・・・なんかすごい物騒なこと言ったぞこの死神。

「今、僕の事殺そうとしてただろう。」

言葉をかけると死神は悪戯を仕掛ける時の様なニマニマとした笑みを浮かべていた。

「あ、ばれちゃった？」

何処か嬉しそうに頭をボリボリと掻く死神。

「もし、あんたがそれで自分に悦に浸っているようだったら殺しているつもりだったさ。」

なんとも正直に申してくれるが、今の問答が命の遣り取りに直結していたと思うと気が気ではない。

「でもあんたは違ったから・・・それでいいんだ。」

しかし、峠は越したのか夕日を浴びて見える死神の顔は何処か安心して見えた。

「他人の犠牲になって悦に浸っている人間なんて見ていてホントに虫酸が走るんだよ。」

それは自分だって同じである。

「僕だって悲劇のヒロインは嫌いさ。」

皆を残していくから。

真っ先に自分が犠牲になって。
無責任に皆を残していくから。

後に残されたものの事なんか考えもしないで。

その自分勝手さが大嫌いだ。

だからこそ、本で読んだそんな話を見る度に、そんな存在がこの世に存在しない事を願った。

そして、今までの生で本の中にしか存在しないような存在であると確信して、安心した。

だからそんな存在に自分が思われていた事に憤慨した。
まあ、自分には省みてくれる人がいないのだけど。

「そっか。」

嘆息。

「最後に一つだけいいかい？」

長いよお姉さん。

もう何度問答をやったと思ってるんだい？

「なんだい？」

そう言いながらも律儀に僕は問いを促していた。

「もし・・・もし映姫様があんたに白黒つけるなら、あんたはどっちだと思う？」

少しオドオドと、申し訳なさそうに問いかけられる質問。

「なんだ、そんなことが聞きたかったのかい。」

答えなど聞くまでもない。

此処まで話して置いてこの死神に推測出来ない訳がない。

これは確認なのだ。

意見を交わし、本当に意志を疎通させる事が出来たかの確認。

「クロだ、クロに決まっているじゃないか。」

死体の服を剥ぎ、死人の思いを踏みにじる悪漢が、クロじゃないわけがない。

「でも子供たちにひつようだったんだろ？」

「だからって死者を冒瀆していいわけがない。」

どんな建前を吐こうが行った事実は変わらない。

「僕は悲劇の主人公なんか気取るつもりはない。」

そんな気持ちの悪いこと僕には出来ないし。

やるつもりもない。

「ただ、そこに必要があつて、やっただけだ、それで罪が許されるはずがない。」

其処には純然たる需要だけがあり、その強固な叫びが供給を引き出しただけ。

「もしも、死んでしまう日が来たら、謹んでその罪をうけるよ。」

それが僕の覚悟である。

僕の安っぽい、薄っぺらい、小汚い僕自身の意地である。
そのとき――

カラン

音が聞こえた。

何処だろう、辺りを見渡す。

カラン

音は近くから聞こえた。

カラン

ゆっくりと、確実に音は無縁塚に鳴り響いていた。

カラン

ここだ。

建物の瓦礫の下、奥まった所から音が聞こえてくる。

カラン

日の届かない奥である。
これは見逃していた。

カラ・・ン

少しづつ音が弱くなる。

「今行く！」

声を掛けて瓦礫をどける。

「小町、手伝ってくれ。」

「・・・わかった。」

死神が加わると一気に作業は進んだ。
大きな瓦礫をどけ、奥に進む。

・・・カラ・・・ン

最後のよわよわしい音の直後、その場に辿り着いた。

「一応・・・分かっていたつもりなんだ。」

其処にいたのはうつ伏せになっていた少女。

「こんな状況で、生きている者なんていないって。」

足がちぎれ、動けなくなった少女。

既にその命はここになかった。

「でも、万が一可能性があったなら。」

辺りには大量の血が散乱し、必死に助けを求めたのだろう、近くの瓦礫には引っ掻いたような後がそこら中にあった。

「救いたいを思うことは、間違いじゃないだろう？」

それは死神に対する言い訳であり、同時に今までここにいる人達に行ってきた行為への言い訳。

そんな事を思うべきではないことは分かっている。

苦しかったろう

悲しかったろう

しかし、思わずにはいられない。

こんなに血まみれになって。

段々と死んでいく自分を自覚することが、どれだけ恐ろしい事だったか。

何か理由があったとしても、こんな小さな子を一人にした事に怒りを感じずにはいられない。

既に温もりがは去り、体はずっと前から動かなかったはずだった。

鳴っていた音の正体は女の子の小さな手に握られていた缶。

「見つけて欲しかったんだろうね。」

後ろから声がかかる。

最初から分かっていたのか死神は驚くことなく少女の体を見ていた。

「たとえ死んでしまっても・・・」

「・・・そうかい。」

ならば、この奇跡に感謝しよう。

このまま一つの商品を取り損なったことに。

「よっと。」

僕は少女の体から服を脱がせ、必要なものを奪っていく。

血まみれの服はもう使い物にならないが、布としてはまだ使える。裸に引ん？いて少女を地面に横たわらせた。

「救いを求めてきた少女にも、容赦はしないんだね。」

その声は残酷だった。

目の前で、苦しんで死んだ少女の惨状を見て、それでもお前はまだ少女を苦しめるのかと。

「当たり前だろう。」

何度も言うが僕の意地なのである。

「他の死んだ人達だって、苦しんで死んだんだ。」

原因は同じで死は何も変わらない。

「他と違うのは、この女の子が僕に知らせてくれた事だけだ。」

ただ少し見つけにくい場所にいて、見つけられない様だったから救いを求めてきただけである。

「僕がこの少女に何もしなかったら、他の人達に申し訳が立たない。」

自分の情だけで変えていいものではない。

それこそ死んでいった人達への冒瀆であり、最低のことだから。

少女が握っていた缶を盗った。

“○クマドロップス”

そう書かれた缶詰めはカランカランと音をたてながら、少し名残惜しそうに少女の手を離れた。

瞬間、能力が発動し名前と用途が分かる。

全てを選び分け皆がいる場所へ体を置く。

少女の顔は冷たくて、腐り初めていたけれど、何処か嬉しそうな顔をしていた。

「それは何だい？」

死神は少女の持っていた缶が気にかかる様である。

「とてもいいものさ。」

見た限り、手付かづの死体はなくなっていた。

これ以上探すのは今からでは無理があると判断し、今日の仕事を終わらせる。

懷から取り出したそれをカラカラと揺らし、夕日に向かって掲げる。

「ふうん。」

死神はつまらなさそうに声をあげた。

答えをはっきりと教えてもらえないことが不満であるらしい。

しかし、教えない。

僕のちょっとした嫌がらせである。

「それじゃあ僕は帰るよ。」

荷物を纏め、帰り仕度を始める。

「私は、別にあんたのことが嫌いじゃない。」

「なんだって？」

信じられない言葉を聞いた気がした。

「私は死神だから、死を大切に扱う奴は好きさ。」

今までの事はなんだったんだ。

嘘だとは思えない。

まず、自分は死神が評した様な存在と最も縁遠い存在であるはずなのに。

「周りを見てごらん。」

いつの間にか、そこら中に今まで身ぐるみを剥いできた人達が立っていた。

「……………」

沈黙

何を言われるのか。

自分は殺されてしまうのかもしれない。

覚悟は既に決まっていた。

全員が動いたと思った瞬間――

皆が一斉に頭を下げた。

「クソみたいな奴に、皆が頭を下げるかねえ？」

笑っていた。

たくさんの人がいて、酷い事をしたはずなのに。

視線を足元に降ろすと、先程の少女がいた。

「あんたがいなければ、その体は腐り、魂が彷徨っていただろう連中さ。」

皆は笑った後、直ぐに消えていった。

一人一人、少しづつ数を減らしていく。

「あんたが丁寧に、心から、死体を扱い、救いがあるようにと祈ってくれたから、こうして自覚を持って旅立てる。」

最後に、女の子がニコリと、花が咲いたように笑った後、其処はまた何事もなかったようにひっそりと静かな無縁塚に戻っていた。元々、言葉は話せない亡霊達だったけれど、あそこには明確な言葉

が存在した。

「“ありがとう”だってさ。」

自覚をもって里で嫌われた。

自覚があるからこそ、嫌われ続けていられた。
それでも――

「そうかい。」

嬉しくはあったと思う。

これ以上ない位に、今までの事を謝りたくなる位に。
・・・これからのそれをやめたくなる位に。

「なんだい、泣いてるのかい？」

ニヤニヤと笑っている死神。

水を差してくれたものである。

せつかく人が神妙な気持ちになっていたのに。
だからこそ、一欠片だけ感謝した事など絶対に言わない。

ただ一つだけ、お礼をしよう。

「これの用途だったね。」

それは少し誇らしそうに夕日に照らされていた。

「人を笑顔にするのさ。」

少女の口の中にも、小さくなったそれが入っていた。

最後のあの緩んだ表情は、それのおかげであったと信じて疑わない。

「それも売るんだね。」

何を当然の事を聞いているのか。

「勿論だ。」

僕は何度でも此処に来て
商品を盗り、里の人に売っていくだろう。

「また来るんだね。」

だから、何を当然の事を聞いているのだ。

「当たり前だ、僕は商人なんだからね。」

何度でも此処に流れ着いた人々の身ぐるみを剥ぎ
何度でも此処に流れ着いた人々の冥福を祈ろう

鴉（後書き）

少し日があいてしまいました。

今回の死体達は作品とは何の繋がりもありません。

不謹慎だとは思いつながら意識したのは三月の大地震。

あそこで行方不明となった人々がそのままになるのがどうしても自分としてすごく嫌で、世界は違えども安らかに逝けた事を祈ってこの作品に使わせていただきました。

申し訳ない事に死者への扱いを作品上でとても蔑ろにしてしまったのですが、作者も霖之助も祈る気持ちは本物です。

自分も被災地に知り合いがいて、その時に抱いたその人への不安が未だに胸の中に残っています。

悲しんでばかりもいられず、何もない状態からでも生き続けなければいけない。

そんな時、もし本当に必要な状況に迫られたのなら。

是非を抜きにして行動を起こさなければならぬことがあります。

こんな事を書いていいのかも本当はよく分かっていません。

もしかしたら胸の内に秘めて作品だけを楽しんでもらった方がいいのかもしれない。

それでも、自己満足だと思いつながらも、たくさんの人達のこれから幸せを願っています。

自分にはほんの少しの事しかできなくて、とても歯痒くて、悔しかった。

その災害から期間があいた今だからこそ、あげるべきものだと思います。投稿させていただきました。

気を悪くされた方がおられたらすぐ言うってください。

訂正もしくは削除を行わせてもらおうと思います。

祈る気持ちで書いた文章で気を悪くされたのならそれはおそらく駄文なのだと思います。

長々と書いてしまいましたがここまで読んでくださってありがとうございます。
ございました。

感想・ご指摘等あれば頂けたら幸いです。

最後に、東日本大地震に於いて亡くなられた方々に謹んでご冥福を
お祈りいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4447y/>

幻想郷フハフハン録

2011年12月19日23時50分発行